WASON
HQ
1104
J74+

明治廿六年四月二十九日發兌

女學雜誌

第三百四十三號

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號目錄

時事
奬學資金候補者の試驗

兒鑑
黃金機會（若松しづ子）

家政
朝貌を種ふるの利益（けい子）
家內重寶錄（海川魚料理法）

小說
春風裡（トオストイ作、不知庵主人譯）

開書
有志の諸姉に御相談の件々一つ二つ（田舍の一女子）

文藝
案山子廼舍東京社中歌結

雜錄
米國に於ける下婢。今昔物語り（細川越中守の金言。江戶の茶屋。家康の教訓）笑ひ草（地理學の教師。田舍の彗星）

問答
日本全國收獲の米○犯罪者の男女（飲酒者と犯罪者）○產婆の敵○醫師の數○電話交換加入者の數

書架
ウエスト女史遺訓○世界博覽會に對する日本婦人○婦人東洋傳道局報告○日本女學史の評○繪入幼年歷史○家庭教育、和漢泰西新智夢

隨感
密室默禱（吾等罪あることを感ぜず、吾等救はれたることを感ぜず、吾改悔足らず）

史傳
山田米子女史行狀（櫻井成明）

附錄
修正小倉百首

前號目錄

時事
國粹論の末路。女のたしなみ。禮に精と式とあり。國粹保存論の功過

開書
藝妓の實況。刄なくして人を殺すはメカケなり（炭谷小梅女史）

小說
春風裡（トヲストイ作）不知庵主人譯

兒鑑
林のぬし（下）若松しづ子

問答
書狀を手紙と云ふ譯○一筆と書く譯○下婢學校の在地○赤兒のシヤクリ止める方○府下にて外國人寄留の數○諸の動物懷胎の日數比較

女報

附錄
修正小倉百首

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第拾八巻　第三百四十三號
（明治二十六年四月二十九日發兌）

時事

○奬學資金候補者の試驗

米國の有志婦人が設けたる、日本高等女學生の爲の奬學資金候補者に對し、去月末、東京に於て初回の試驗執り行なはせられたり。

之が候補者たらんとするもの、最初は中々に多き樣聞えたるに、期に至り、實際申出でたる數の至つて少なかりしは、稍や意外の躰なきにあらず。凡そ、懸賞論文の類ひに對して問に應ずるもの、常に第二流以下の論者に多く、第一流の族は、兎角、重を持して斯る競爭角力的の所に出でざるが、世の習ひなれば、此の奬學金候補者の試驗に於ても亦同じきとなからずやなど掛念せし人もありき。此掛念當りしや否やを知らず。但だ、實際の申出者意外に少なかりしによりて、稍ゝ此邊の思惑なきにしもあらず。

則はち、試驗の候補者たりしもの七名、皆これ、當世の俊才たると、疑がふ可らず。吾黨は、其の第一流の女學生たるとを確かに見とむるもの也。但だ只だ此問に應ずるとを得るもの、僅かに此少數者のみと思はれんと太はだ遺憾なり。特に、米國の婦人にして、かゝる想像を立つるに至らば、眞に、本邦女學生最上の歎惜あるべし。

七人の候補者が姓名、年齡、及び出身の學校左記の如し。

東京普連土女學校出	笠井脩子	明治五年一月生
同　前	富井まつ子	明治八年二月生
東京立教女學校出	栗原ゆう子	明治三年三月生
同　前	丹羽瀨その子	明治九年四月生
東京女子學院出	山岸みつ子	明治七年三月生
同　前	岡田みつ子	明治八年八月生
西京同志社横濱フエリス女學校出	松田みち子	明治元年九月生

右七名に對し、去月二十八日以后五日間、東京明治女學校構内に於て執行せられたる試驗凡そ八科あり。今左に其問題の大略を掲げ、試驗の程度を推測せんとする人の便に供ふ。

●漢學問題　(時間一時半)　受持、南摩綱紀君

十八史略

(一)李密初從楊玄感起兵玄感敗密變姓名亡匿時人皆云楊氏將滅李氏將興又有民謠曰桃李子皇后走楊州宛轉花園裏勿浪語誰道許桃李子者逃亡李氏子也莫浪語誰道許者密也

文章軌範

(二)齊王好竽有求仕於齊者操瑟而往立王之門三年不得入叱曰吾瑟鼓之能使鬼神上下吾鼓瑟合軒轅氏之律呂客罵之曰王好竽而子鼓瑟瑟雖工如王之不好何是所謂工於瑟而不工於求齊也

(三)自古聖人賢士得其道不敢獨善其身而必以兼濟天下也孜孜矻矻死而後已故禹過家門不入孔席不暇煖而墨突不得黔彼二聖一賢者豈不知自安佚之爲樂哉誠畏天命而悲人窮也

十八史略

(四)桓彝避亂過江見睿微弱憂之既而見王導退謂周顗曰江左有管夷吾吾無憂矣諸名士遊宴新亭顗中坐而嘆曰風景不殊擧目有江河之異因相視流涕

(五)王敦遂擧兵王導率宗族每旦詣臺待罪周顗將入導呼之曰伯仁以百口累卿顗不顧入見帝言導忠誠申救甚至帝納其言顗喜飮而出導又呼顗不與言顧左右曰今年殺諸賊奴取金印如斗大繫肘後

●和文英譯問題　(時間一時半)　受持、神田乃武君

(一)我身のかなしき折は手すり足ずりして其事やみぬればやがてあくる日よりさる事のありしさだに思ひ侍らぬ事いさ心うきわざ也

(二)およそ男夫は稼穡をつさめて己も食し人に與へても飢えざらしめ女子は紡績を事さしてみづからもき人をもあたゝかならしむ賤しきに似たれども人倫の大本なり

(三)賢人君子なさの位になるほどの人は更に我身さいふ物を思ふ事はあるべからずひさへに國の爲民の爲めに心をくだき己をわすれ人を助くるなり

(四)古にはなくて今はあるもの多く古はあしくて今のはよき類多しこれを以て思へば今より後もまたいかにあらん今に優れるもの多く出で來るべし

(五)珍らしき書を得たらんには親しきもうさきも同じ心ざしならん人にはかたみにやすくかして見せもし寫させもして世にひろくせまほしき業なるを人には見せず獨みてほこらんさするはいさ〳〵心きたなく物學ぶ人のあるまじき事なり

●日本歷史問題　(時間一時半)　受持、三上參次君

一、四道將軍さは如何なるこさなりや

二、齊明天智兩天皇の我邦の版圖が西に縮み東に伸びし次第を略述せよ

三、天慶の亂さは如何、併せてこれに就きて當時京都さ地方さ事情の相通ぜざりし一斑をしろせ

四、持明院大覺寺兩皇統(即チ後深草龜山兩統)の爭ひさいふこさを簡單に說明せよ

五、織田信長の尊王の事蹟は如何

六、我邦の歷史に最も大なる關係ありさ思惟する女性五人をあげよ(但し女帝の外にて)

七、簡單に左の人々の事蹟を述べよ

(甲)僧　空海

(乙)藤原俊成

(丙)狩野元信

(丁)物徂徠

八、簡單に左の事柄を說明せよ

(甲)院政

(乙)參勤交代

●文法　(時間一時半)　受持、高津鍬二郎君

(一)左の詞に假名を附けよ

氷、粟、故、肥、魚

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(二)左の動詞の活用如何
老、堪、教、植、攀
(三)自動詞と他動詞との別如何例を擧げよ
之を説明せよ
(四)左の文に付いて詞遣ひの調不調を説明せよ
(甲)虎死せば皮をとゞむ吾人死すれば何をかとゞめん
(乙)忠孝の道こゝに極まり侍りにし苔の下にも埋れぬものはたゞ名をのみぞとゞめたりき
(丙)昨夜竊盜隣家に忍び入りて衣服雜品をぬすみとられしが今朝は既に警察の手にて捕縛したり

●和文解釋　　　受持、　高津鍬三郎君

(注意全文を解釋すべし但し(一)の外は自由に二題を撰ふべし)

(一)中陰の程山里にうつろひ居るにはての日はいとなさけなり互にいふこともなく我かしこげに物ひきしたゝめちり〳〵にゆきあがれぬもとのすみかにかへりてぞ更に悲しきことは多かるべきしか〳〵のことはあなかしこ跡のためいむなることぞなどいへるこそかはかりの中に何かはと人の心は猶うたておぼゆれ年月經てもつゆ忘るゝとにはあられどさる者は日々にうとしといへるごとなればいへどそのきはゞかりは覺えぬにやよしなしことなといひてうちもわらいぬ
(二)(平家物語、仲國小督を訪ふ段)
明日より大原の奧へおぼしめしたつことゝ候は定めて御さまなどもやかへさせ玉ひ候はんすらん然るべうも候はずさて君をば何とかしまゐらせ玉ふべきゆめ〳〵かなひ候まじ相かまへて此女房出しまゐらすな
(三)あはれ紅葉をたかん人もかなしるしあらん僧たち祈りこころみられよ
(四)三條太政大臣賴忠公はあまりよろづしたゝめあまりを給ひて殿のうちによひにともしたる油を又のつとめて侍に油かめを持たせて女房の局までめぐりて殘りたるをかへし入れて又今日の油に加へてともさせ給ひけりあまりにそたてある事なりや
(五)淳子院の法師にならせ給ひて大内山といふ所に深く入りて行はせ給ひければみやす所も世の中すさまじくおぼして家につく〳〵となかめゐたるなりけり内わたりの事どもことにふれ思ひ出でられ物あはれに思ひゐたるあいだに內の方にききおふこゑしてなほし姿なる人入り來たる誰にかあらんと思ひてみれば伊衡の少將のきたれるなりけり

●作文の題　　　(二時間)

貞節の說

●算術問題　　　(二時間)　　　受持、　野口保興君

(一)二數の和、1892にて差は598なり由て此の二數を問ふ
(二)溜池に三つの木管を備ふ甲管は毎時二百石の水を注ぎ乙管は毎時百四十石の水を注ぎ丙管は毎日四千四百四十石の水を流失せしむと云ふ一週間に幾石の水を蓄ふるを得るや
(三)$\frac{3+15}{29-5}+\frac{93-7}{32+17}$
(四)二時と三時との間に於て分時兩針が一直線をなすは何時何分何秒なるか
(五)$(2\times500.25-1)\times2.5$を$4\times3.25$にて除すれば如何
(六)循環小數とは如何なるものなるか
(七)金二百七十五圓を一ヶ月金十五圓に付二十五錢の利割にて貸附するときは一ヶ年の利金幾何なるか
(八)男工女工童工にて四十三人あり共に一週間働きて賃金百二十圓四十錢を得たり而して毎週賃金は男四圓二十錢女一圓四十錢童七十錢なり由て各工の數を問ふ
(九)三十二万七千八百九十二尺を里町間尺に改算せよ
(十)長方形の宅地の面積は一千六百八十坪にて間口と奧行との和は八十三間なりと云ふ由て奧行及び間口の各を問ふ

●代數問題　(二時間)　受持、野口保興君

(一)次の積を計算すべし

$(3a^8b^4+3a^9-2a^8b-4a^7b^2)\times(7a^5b^3-3a^6b^4+9a^8b^2-3a^3b7)$

(二)左の三式を加ふべし

$$\frac{1}{(a-b)(a-c)(x+a)}$$

$$\frac{1}{(b-a)(b-c)(x+b)}$$

$$\frac{1}{(c-a)(c-b)(x+c)}$$

(三)次式を最簡にすべし

$$\frac{1-a^2}{(1+ax)^2(a+x)^2}$$

(四)次式中に於て$x=-2$として數値を算すべし

$$\frac{x^4+10x^3+35x^2+50x+24}{x^4-2x^3-13x^2+14x+24}$$

(五)次の二ツの方程式に依りてx yの値を算出すべし

$5/x-3/y=3$

$25x-9y=81$

(六)次の方程式を解くべし

$3x^4-4x^2+15=0$

(七)次の方程式を解くべし

$$\frac{2+5x-b}{x+b}=7-6b$$

(八)馬車あり甲所より乙所まで進行せしに周圍四尺と四分の一なる前輪の回轉數は周圍七尺と八分の一なる後輪の回轉數より多きこと二十回なりしと云ふ由て兩所間の路程に問ふ

(九)四數あり其内の三數づゝを取りて相加ふれば九、十、十一、十二を得ると云ふ由て此の四數を求む

(十)二十一斤の銀塊は水中に於て重さ二斤を失ひ九斤の銅塊は一斤を失ふと云ふ並に銀と銅とを含有する雜銀の一塊あり其重さは百四十八斤なるが水中に於ては十四斤と三分の二を失ひたり由て此の雜銀中の銀銅各の目方を問ふ

●地文學問題　(二時間)

(一)地震の原因

(二)霰の生ずる理由

(三)毎年五六月頃に梅雨の季節とて連日雨天なり其理由如何

(四)日本黑潮の解明

(五)氷山の說明

(六)潮水に高潮と低潮との別あり其原因如何

(七)貿易風の說明

(八)龍卷の起る原因

(九)時と場所に由り露點に高低あるは何に起因するか

(十)雷鳴の原由

●物理學問題　(二時間)　受持、寺尾捨二郎君

一、砂糖木片白墨等を水中に沈むれは泡沫を生ずるの理如何

二、木炭又石炭を燒くにはれることあるは如何

三、椅子より立んとする人は何故に前に屈むべきや

四、龜の背を地上に置けば何故に起ると能はざるか

五、何故に肥滿なる人は步するに其頭と肩とを後へにそらすべきや

六、何故に魚類は忽ちにして水中に浮沈し得るや

七、地上に於ては二人の力にても舉け難き石を水中にては何故に一人にて容易に之を運搬し得るや

八、笑聲の生ずる理合如何

九、明月の光は物の腐敗を招くと云ふ實耶

十、冬に於て岩石の多く破るゝの理如何

○十一、雷の夏に於て多く冬に於て少きは如何

十二、電鳴のゴロゝゝするは如何

十三、何故に河は實際よりも淺く見ゆるか

十四、夜中火事を近く見過すの理如何

○十五、音叉を吊して打てば其音細くして聞き難けれども其柄を机に接すれば音強きの理如何

◎○十六、壓力は氷結の際膨脹する物躰の氷結點を低下し氷結の際收縮する物躰の氷結點を高くすと云ふ其理由如何

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎〇十七、溶熱の解説
〇十八、人爲を以て寒冷を生ずる方法如何
〇十九、金箔電氣針を以て某種電氣の陰陽を驗する方法如何
〇二十、電池に於て水素瓦斯の銅板より現はるゝ理如何
◎〇二一、電池用の亞鉛面に水銀を塗るの必要如何
◎〇二二、光の速度を計る方法如何

（以上問題ノ中◎印のものは最も善く其次には〇印のものを可とす）

●英國歷史問題
ENGLISH HISTORY.

Time 2 hrs.

I. What was the character of the English conquest of Britain and from where did the Conquerors come?

II. Who were the Normans? Discuss the claim of William the Conqueror to the English throne.

III. What were the causes of the great Civil War? When did it take place and was the outcome?

IV. What was the character and tendency of the government under Henry VIII.

V. Give the names of the rulers of England from 1013 to to 1204.

●英文和譯
ENGLISH INTO JAPANESE.

甲 *Time 1 hr. 30 min.*

I, There is not one of the seven addresses but sparkles with epigram and bristles with points, and good points too.

II. One feels as one reads them that the speaker is a gladiator, well trained to find the vulnerable points of the educational harness of to-day and that, when he strikes, he strikes home.

III. Home, to many in a large degree, to all in some degree, is but a name for cookery.

IV. How many men there are that the whole world praises who are just making the ends meet!

V. It is difficult to cudgel him out of a farthing, but put him in a good humor, and you may bargain him out of all the money in his pocket.

VI. His manor infested by gangs of gypsies, yet he will not suffer them to be driven off, because they have infested the place time out of mind, and have been regular poachers upon every generation of the family.

VII. They understand he is mortgaged over head and ears, and is continually dabbling with money lenders.

His very faults smack of the raciness of his good qualities. His extravagance savors of his generocity; his quarrelsomeness of his courage; his credulity of his open faith; his vanity of his pride, and his bluntness of his sincerity.

乙

I. If this was short sighted policy, it at least put the Athenians in an almost imperial position for the time being, and carried forward the little democracy to a wonderful degree of power and splendor.

II. It was thus at the very moment that Greece began to lose her political freedom that she made as it were an intellectual conquest of a large part of the world.

III. Even in gentlemen's houses, the second story (when there was one) was approached from the outside.

IV. He urges, in fact that we should begin to recognize that teaching worth the name is costly.

V. The perfectly educated will be jack-of-all trades, and master of one.

VI. The school of the future will as soon think of being without books as without pictures.

VII I think that as the world goes, there is more happiness without wealth than with it.

Select any five (or more if there is time) out of the two sets of questions, the 甲 set being preferred.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

黄金機會（上）

若松しづ子

私は二十になつた今日までの生涯にこれぞといつて人さまにお話し申す大事件もなく、父母の膝下に穏やかな年月を送つて參り升たが、併し子供心に刻みつけられて一生忘れられまいと思ふヿが二ッ三ッ有り升。其中十一才の誕生日に有つた事柄をお話し致しませう。私は子供の中から日課の本より戯作もの實錄ものなど讀むが好で、十一才の時分にはモウお袋の仕事する傍らに坐つてさま／＼貸本やの書物などや、父が讀ふるしの雜誌なども好んで讀み升た。讀むもの丶中には解し惡い處は固より尠からず有升たから本を膝の上へ置て母に質問するヿが度々有つて、それでも分らぬ處は想像にたより、よく／＼夢中で讀む處もないでは有ませんでしたが、さういふ處は據なく捨置いていつか分る時もあらうと茫然と迂遠な區域に止め置て、別段苦もいたしませんかつた。十一才の誕生の日には母の免しを得て一日學校を休み、例の通り少し斗りの祝をして貰らい升た。午の赤飯、煮しめも食べ終つて、午后は雨もようしで外出も出來ませんかつたから雜誌のよみかけを讀まふと母に相談し、さてある社會改革者の事業の一段に讀み及ぼして「此黄金機會を外さず」といふ一句へ來升と、書物を下へ置いて、母の顏を覗き、質問いたし升た。

おつかさん、黄金機會ッてなに？

大層好いをり、好都合の時といふヿですよ。

では、なぜ黄金ていの？、金のをりなんて、なに？

母はニッコリ笑つて、それは西洋風の譬の言葉で、金といふものは大層貴い、稀れなものだから、其塲合が貴くつて稀な機會だといふ代りに黄金といふ重寶な一字で間に合せるのだとおいひでした。

私は篤と母の説明を考へ合せ、かふ申升た。

かあさま、其黄金機會ッていふ樣なヿはお金のたんとある人か、さうでなければ、昔しの人か、さうでなければ書物に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

書てある、マア日本で正成とか、西洋でワシントンとかいふ様な人にしかないかと思ひ升ネ。なんだかふだん見る本統の人や子供にはない様ですわ。
ナニ、俊子の様な子供に其黄金機會がないとおいひのか？おまへ一寸、さしあたりどんな黄金機會が入用なのですか、
私は今考へれば極く取止めなき子供らしい答へをいたし升た、
さうネ、こないだ雜誌で讀んだ西洋の婦人みたいにどこか戰爭のある處へ行つて怪我人の看病がして遣り度いですわ、さうでなければ、ソラ日本の歷史にある橘姫みた様にお國に大切な人の身代りになり度の。アラ、それでも私が海へ跳び込んで見たつて、何の益にも立たないのネ。
さうですとも。何の益にもたちませんよ。
私はまた少し考へ、
それから、またそれが何か人の益にたつたつて、自分にはなんにも分りませんものネ、つまらないわ。死んぢまうんだもの。
母はまた笑ひながら「さうとも」といひ升たから、餘り馬鹿らしいといふて恥しいとおもひ、出直てモソット俐巧らしい考案を出しました。
かあさま、それはいけないとして、こんなとはどうでせう、饑饉でみんな貧亡人が斃れて死んでしまうといふ時、お倉にお米や、お金が澤山ある人になつてゝ、みんなにどん〱施しをして遣るといふ様なのわ。デモ、さういふ黄金機會がなにもないんですもの。
いゝへ、さうとも一概にいへませんよ。人に善を施こすといふ折は誰にも隨分有るもんです。さうして其折を外さず用ゐて行けば、キット人を助けられるもんです。つまりわたしたちの心一ツで黄金機會が出來るんですよ。
アノ、西洋のハウアドとかいふ人ネ、牢屋にはいつて居る可愛さうな人を助けて出してやつたつてネ、わたしもあの鎖で繫がれて馬や牛みた様に働らかされてる人たちをゆるしてみんなうちへ歸る様にして遣り度と思ひ升たけれどネ……それは出來ませんのさ、しかし貧亡人に人間の義務といふものを敎へて遣つたり暮しの立つ様に家業を見つけてやつたりして、貧に迫られて、盗をしない様に世話

をしてやれば、始から牢やへはいらない様にしてやれませう。

母は此時私に噛んで含める様にかふいふことの心得をいひきかせてくれまして、人が善をしよふと心掛ければ決して機會の見つからぬことはないといふことと、ハウアドと他の人々の違ふ處は當時の事情よりか、忍耐と熱心のあるないに因るといふことなどを細々と聞かせられましたが、其話しは一々今覺へて居りません、たゞ間もなく祖父の部屋へ連れて行かれたことを覺へて居り升。こゝは祖父が書物をする書齋で、母は中に取り散らした紙や本などの片づけに來たのでした。祖父は今思つて見れば、此時原稿の校正をして居り升たのでした。私は其樣子を見て、兼て母の申聞かせもあることですから、チツト辛抱して默つて坐つて居り升た。其中お祖父さまが摺ものの上へ筆の先で一寸蜒蚓の攣れた様なものをお書なすつたが見へ升たから、不思議で〳〵、默つて居やうと思つても、堪らへ切れませんで、ツイ

おぢいさま、そのめゝずみたいな物なぜお書なすつたの？

なぜつて、字が倒まになつてるから、活版やに直せといふ記したよ。

ナモ丸でめゝず見たよふですわ、活版やで知つてるのかしら、ヒヨツト知らないで、そんなめゝずの繪を入れてしまつたらどふでせう？

祖父はわたくしの申したことが聞こへた顔もせず、筆を筆立へ納めて、大欠伸をし、母に命じて捲いた書物を待たせて置いた小僧にやらせ升た。祖父は母の部屋を出る姿を見送り、私を側へ引よせて、

どふだ、貴樣はお袋の樣な音なしくつて悧こい女になれるか、チツト六ケ敷樣だな、今のみゝずの話しも十一の兒にしちやア餘り馬鹿げた樣だな、どふだ、アハヽヽ、そんな眞目面な顔をせずともだ。けふは貴樣の誕生日だらう。何か祝つてやらずばなるまいな。どふら。

お祖父さまは此時冗談半分に革の大きい金入れを出し、中をあちらこちらと反して見て居られました。さうして、

おぢいさんなんぞが子供の時は、誰も金を呉れる人はなかつたぞ。

私はお祖父さまの、機嫌のよくなつたを見濟まして、側へす

りよりて、財布の中を覗き升た。其中に、一圓の金貨が六ツか八ツも有升たがお祖父さまは軈て其一をとり出して麗々とわたしの手の掌へ載て下つた時、矢張冗談かと思ひ升た。

貴樣それがなんだか知つてるか？

金貨の一圓でせう。

どふだ、貴樣にやるがつかへると思ふか？

エー〱つかへ升とも。

イヨー、中々慾に抜目はないな。貴樣にやつたつて益には立ないが、どふも仕方がない、誕生日のお祝ひにやるとしよふよ。

アラ、あんなヿ仰つて、益にたゝないなんて、なぜ？

格別の益にはたゝんといふのだよ、着るものや、食るものや、雨露を凌ぐ家はみんな兩親に供へて貰らふのだから、外に大した入用はないではないか？

さうネ、それでも此金貨はわたくしの好な樣につかつてよう御坐い升か？

よいとも、モウ貴樣にやつたものだからな。

全躰、おぢいさまなにかへこんな金貨いくら持つて入つしやるか知れないのネ、つかつておしまひなさるとまたあとからお金入れへはいつて居升のネ、

さうかな。

私なにかは、この一ツつ切りじやありませんか、だから大事ですわ。アノおぢいさま。アノおぢいさまはみんなお金をどうしておしまひなさるんでせうか、私なんかそんなにたんと持つて居たらいろんな好なもの買升けどネ。

いかさま、先第一木彫の人形か、其次は…………イヤ中店のおもちやを一手買占も出るだらうな。處がたつたこれ一ツしか授からないから、先づおあいにくさまといふ處だ、貴樣がうつちやる權理のあるのはこれ一枚限りだ、おあいにくさまだナア、アハヽヽ

でも、私だつてうつちやると極つてはしませんよ、なにか好ヿにつかふかも知れませんもの。

善根を蒔く爲につかふといふのか、これはしたり、それはまた大したこつたな、さうともそれなら、うつちやるんじやないとも。

それから私は先刻讀んだヿから、母に聞いたヿを細かに話し

始め升て、丁度おしまひにしよふといふ時、下女がはいつて來て、もみくちやになつた紙の上に二十錢の銀貨と一錢銅貨を載せて、「御隱居さま、靴やにお拂ひを遣り升て、これがおうつりで御座い升」といひ升た。お祖父さまはそれを請取り、銀貨を引くらかへし、兎見角見して、新らしひ銀貨だと仰つて二ツとも其まゝ私に下すつて、まだ書物があるからといつて急に私にあちらへ行けと仰り升たから、私は眞直ぐ母の居處をさがして、生れて始めて持つた莫大の富を母に示し升た。

○陳蕃云く、一室を掃除せずして天下を掃除すと。去れど一室を掃除せずと云ひたるは疎豪にして縝密の氣象を欠きたり。後來愚昧不肖の竇武と同謀して事を誤まる可き氣習已でに見へたり、と。太田錦城は、梧窓漫筆に述べたり。一理ある言にて、大功細瑾を顧みずなど言へる東洋風の豪傑が事を誤まり易き所以、多くは此にあり。

○消閑雜記に佛祖錄を引きて、動心の事を詠める歌

思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじや君

家政

○朝貌を種ふるの利益

けい子

家政に意を留る人は、今は恰も其時なり。宜しく朝顏の種を蒔くべし。朝貌の花に二得あり。其を如何にといふに、第一は花の美しきに誘はれて、日頃は朝寢に耽り、烏も啼き、雀も啼き、茜さす日影も早三竿の高きに登りて、尚目覺めぬ人々も、何時しか朝露の消えぬ間に、起出づるやうになるなり。朝寢の癖ある人の偶々の早起は、大方不愉快を感じがちの者なれど、此花の麗しきを見ては、自ら胸も心も涼しく成行き、其不愉快も何處へやら消行んと疑ひなし。斯くて一朝、二朝と花を見るが樂しさに、早く眠を覺す中には、何時しかそれが一の快樂となりて、雪の間の紅筆に喩へし蕾の數をかぞへて、翌朝の花の數に引合はし、花の數の二ツ三ツ蕾の數よりも多きに、偖は葉蔭に忍ばせし紅筆に心付ざりしかなど、甲斐なき事を恨むも可笑し。それより二朝は三朝、三朝は四朝と、曉の霜深くして花の形の追々に細り行く頃までも續けば、早や起は習慣、性の喩へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

起んと思はざるに目覺むるやうに成り、此度は以前に引換へて、早く起きざれば心地惡しきやうになると共に、身躰の健康はいふに及はず、日々無益の睡眠に費やせし時間を、有用の仕事に宛つるやうになり、衞生、家政、何れの道よりいふも、此上なき利益を來すこと勿論なるべし。第二は此花古昔より果敢なきもの丶中に數へられて、露の乾ぬ間の朝貌なぞとかこち、彼俳諧師の中にも、破笠は之を見て「朝貌は繪にうつす間をしほれけり」といひ、才麿は「朝貌のすこしの間にて美しき」と吟じたれど、是は只一ツの花を見ていふ事なり。全躰の上より見れば、朝貌は啻に花の間の短か丶らざるのみならず、大方の花よりは却て長きものなり、現に此花の一輪、露の乾ぬ間の色を保ちて、美し麗はしと稱ゆるも夢の間、日光一たび東の空に耀き渡れば、ありし籬頭の錦は褪めて、復色なきに至ると、恰も人生の賴みがたきが如し。去れば古昔より桑門の輩、此花を見て悟道の端となしたるも道理の樣なれど、翻つて其全躰の上より見ば如何。櫻の艶なるも一週日は保ち難く、梅の清きも二旬とは見るべからず、然るに此花好し百日紅の久しきに若かずとも、尙朝な〳〵の色を替て、長きは五旬の花を保つことと、豈短かしと云ふを得んや。去れば此種を蒔く人は、他の盛り短き花に比べて、樂しみの多くの度を享け得るの利益あるなり。已に朝寐の癖をなほし、又此長き盛りを保つ、此花を種ゆる人に損なきと、電氣燈を見るよりも明かなるべし。此花種類甚だ多し、今之をうゆる人の爲めに、其中の最も珍らしきものを擧ぐれば左の如し。

形によりての區別

蘭菊。花瓣大低五ツに別れ、花の模樣蘭に似たり○ねぢ梅。花冠ねぢれて梅花の形をなし、時としては自ら開き能はざる事あり。然るときは息を吹掛くべし。直に開くなり○孔雀。雄蕊變じて、花冠と同質の茶せん形の圓きものとなれり。但し花冠は通常のもの○牡丹。雄蕊も雌蕊も悉く花辨と變じ、十五又は十餘瓣に別れ、其形牡丹の花に似たり。去ればかくは名付けしにや。此花頗る美なれども、斯く雄雌兩蕊の悉く花瓣と變じて、植物の緊要組織を欠くを以て、種實を結ばず、其年限りのものとす。又此種の朝貌は、種子を下して得るものにあらず。他種より變化して生ずるものなり。多年經驗せし人の話に、大抵雨龍の種より變生すといへり。此

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

牡丹目下棗駝師の最も貴重するところにして、其價も亦殊に貴し○雨龍。花冠分裂して、十個或は十個以上の瓣となり、毎瓣卷縮して奇觀を呈す。此種は蘭菊及び牡丹の中間にあるものと知るべし、其牡丹と異なる所は、雄雌兩蕊を備へ種子を結ぶにあり○茶臺並形の圓錐形の中部ねぢれて屈曲したるもの。

色によりての區別

小町　紅深く燃るが如くにして、圓錐形の尖端極めて白く、至て上品なる花なり。之に屬するもの紅小町、關寺小町、雨乞小町等あり○ふきかけ絞。色は紅、青、紫等にして、點々霧を吹きかけたるが如きものなり○曙　絞。或は濃く或は淡く曙の如きもの、花のふちより染込みたるもの○はけ絞。一定のきまりなく。殊更に色とりたる如き大形の斑紋あるもの○へりとり。輪廓に白き縁あるもの。

是等を植へば、大抵朝貌の美を盡せるものにして、彼秋天未だ明ざるに、早く車を入谷の里に驅りて、花屋が庭の露を踏むには及ばざるべし。因に記す、朝貌の品位等級を定むるは、素より花の美惡に依ること言を俟たずと雖も、葉も亦之に大なる關係を有せり。何となれば、花は縱令如何に美麗なるも、其葉尋常一樣にして、毫も見るに足らずば、恰も鳥の其聲美なるも、其形極めて醜きに均しく、甚だ愛玩の念を欠ぐものなればなり。去れば其品位を定めんには、第一に花、次に葉を選み、彼緑葉　或は濃く、或は淡く、或は白き斑點ありて、菊の葉の如き形をなし、或はいたく尖りて、柊葉の如き形をなせるもの等を取りて、上位に置くべし。中にも雨龍の葉の廣くして、苣の如き形をなせるなどは、頗る見所あるものなり。

家內重寶

さよ子

日用便利の爲め海川魚の調理法を左に摘錄すれば

（海魚の部）

○鯛　はま燒　すき燒　蒲鉾　膾　刺身　汁　でんがく
　はい物　酒浸　すし（其外いろ／＼遣ふ）
○鱸　さしみ　汁　なます　燒ても能し
○眞鰹　さしみ　すし　燒きてもよし
○鱧　なます　蒲鉾　子いり　こんぎり
○鱈　汁　すし　酒浸
　干していろ／＼遣ふ
○蛸　櫻煮　するか煮　なます　其外いろ／＼
○飯蛸　吸もの　くもだこ
○烏賊　うの花　なます　さしみ　蒲鉾　あへもの　煮もの　燒きいか
　すいもの　さしみ
○鯨　汁　さしみ　はひもの　あへもの（糟に漬けて）

○鱚　さしみ　でんがく
○鯛　汁　なます　でんがく　鍋焼　吸物
○鰈　なます　蒲鉾　汁　でんがく　焼きもの
○鯒　汁　さしみ　いりても用ゆ
○鯵　汁　おきなます　酢いり　なまび　焼きても能し
○鯖　沖なます　酢いり　塩も能し
○ますご　汁　なます　すひもの　たぎり焼き　なまび
○さより　なます　なまび
○魳　焼きて　なまび
○鮟鱇　汁　さしみ　すひものにも
○金頭　汁　焼き物
○ゑそ　なます　水のめ焼き　いりもの
○海耳　なます　あへもの　すひもの
○海老　いりて　なます　煮もの
○小海老　汁　なます　吸物
○伊勢海老　くろま(但ゆでゝ)　又焼きても能し
○絲撚　汁　蒲鉾　なます　焼きて
○白魚　汁　さしみ　蒲鉾　煮もの　いりもの　すひもの
○海鼠　なます　ふくらいり　こだゝみ　すこ　いさにつくり
いり酒かけてよし
わたは吸もの　いりこはけづりもの　煮もの　あへもの
○鰤　水あへ
油焼き　酢いり　白さしみ
○鰆　ごさい焼き　さしみ
○鰹　さしみ　汁　なます　酢いり　せんば　なまび
焼きてたゝきに能し煮さりて鰹をゆでる時の汁なり
○金槍魚　さしみ　酢いり
○鮑　貝焼き　煮貝　酢貝　さしみ　蒲鉾　生干　ふくらに
わさびあへ　のぶすま

○串鮑　汁　けづりもの　煮物　あへもの　いろ〱遣ふ
○鯡　蒲焼　ころばかし
○栄螺　壺焼　にが焼き　煮もの　糟漬いろ〱
○赤貝　汁　から焼き　煮もの　なます　串焼いろ〱
○牡蠣　汁　すいもの　くしやき　杉やき　酢がき
○蛤　むし　酢　鍋焼き　汁　焼きても能し
○あさり　吸ひ物　なしもの
○ばい　ころばかし　煮物　から焼き

(川魚之部)

○鯉　さしみ　なます　汁　すし　こゞり　小鳥焼き
すひもの
○み鯉　さしみ　なます　蒲鉾　吸物
○鮒　なます　汁　煮浸し　こさり焼き　吸もの　こゞり
糟漬　いろ〱
○鱒　はま焼き　さしみ　なます　すし　串焼き
○鯇　汁　ひてりなます　すし　焼きても
○鮎　なます　汁　さしみ　すし　焼きても　白干し
塩引にして肴　酒浸うるか
子はなしもの又子をなますにていり酒かけてよし
○鮭　焼もの　なます　すし　はらゝ汁　蒲鉾　いりやき
なまび　なしものによし　しほ引は肴　酒浸し　同からざけ
水あへ　いろ〱に遣ふ
○鰻　なます　さしみ　すし　蒲焼　杉やき　山椒みそ
焼き　いろ〱
○鯰　汁　蒲鉾　鍋焼き　杉やき
○山椒魚　吸もの　串焼き　こくせう
(何れも皮を去り用ゆ)
○まがめ　すひもの　さしみ　(石亀も同じ)

他は畧す

[illegible]

[illegible]を取りて、上位に置くべし。中にも山脈の東の如くして、[illegible]の如き形をなせるなどは、甚る見所あるものなり。

家内重寶

さ よ 子

日用便利の爲め海川魚の調理法を左に摘録すれば

（海 魚 の 部）

一鯛　はま焼　すゝ焼　蒲鉾　膾　刺身　汁　でんがく

一鱸　はい物　酒浸　すし　（其外いろ〳〵遣ふ）

一[illegible]　さしみ　汁　なます　煮ても能し

一[illegible]　さしみ　すし　煮きてもよし

一鰹　なます　蒲鉾　子いり　こんぎり

一[illegible]　汁　すし　[illegible]

[illegible]

○鱶　さしみ　でんがく
○鯛　汁　なます　でんがく　鍋焼　吸物
○鰈　なます　蒲鉾　汁　でんがく　焼きもの
○鯒　汁　さしみ　いりても用ゆ
○鯵　汁　おきなます　酢いり　なまび　焼きても能し
○鯖　沖なます　酢いり　鹽も能し
○ますご　汁　なます　すひもの　たぎり焼き　なまび
○さより　なます　なまび
○鱒　焼きて　なまび
○鮟鱇　汁　さしみ　すひものにも
○金頭　汁　焼き物
○ゑそ　なます　木のめ焼き　いりもの
○海月　なます　あへもの　すひもの
○海老　いりて　なます　煮もの
○小海老　汁　なます　吸物
○伊勢海老　くろま(但ゆでゝ)　又焼きても能し
○絲撚　汁　蒲鉾　なます　焼きて
○白魚　汁　さしみ　蒲鉾　煮もの　いりもの　すひもの
○海鼠　なます　ふくらいり　こだゝみ　すこ　いさにつくり
いり酒かけてよし
わたは吸もの　いりこはけづりもの　煮もの　あへもの
水あへ
○鰤　油焼き　酢いり　白さしみ
○鰆　ごさい焼き　さしみ
○鰹　さしみ　汁　なます　酢いり　せんば　なまび
焼きてたゝきに能し煮さりて鰹をゆでる時の汁なり
○金槍魚　さしみ　酢いり
○鮑　貝焼き　煮貝　酢貝　さしみ　蒲鉾　生干　ふくらに
わさびあへ　のぶすま

○串鮑　汁　けづりもの　煮物　あへもの　いろ／＼遣ふ
○鯡　蒲焼　ころばかし
○栄螺　壺焼　にが焼き　煮もの　粕漬いろ／＼
○赤貝　汁　から焼き　煮もの　なます　串焼いろ／＼
○牡蠣　汁　すいもの　くしやき　杉やき　酢がき
○蛤　むし　酢　鍋焼き　汁　焼きても能し
○あさり　吸ひ物　なしもの
○ばい　ころばかし　煮物　から焼き

(川魚之部)

○鯉　さしみ　なます　汁　すし　こゞり　小鳥焼き
すひもの
○み鯉　さしみ　なます　蒲鉾　吸物
○鮒　なます　汁　煮浸し　こゝり焼き　吸もの　こゞり
粕漬　いろ／＼
○鱒　はま焼き　さしみ　なます　すし　串焼き
○鯇　汁　ひてりなます　すし　焼きても
○鮎　なます　汁　さしみ　すし　焼きても　白干し
鹽引にして肴　酒浸うろか
子はなしもの又子をなますにていり酒かけてよし
○鮭　焼もの　なます　すし　はらゝ汁　蒲鉾　いりやき
なまび　なしものによし　しほ引は肴　酒浸し　腸からざけ
水あへ　いろ／＼に遣ふ
○鰻　なます　さしみ　すし　蒲焼　杉やき　山椒みそ
焼き　いろ／＼
○鯰　汁　蒲鉾　鍋焼き　杉やき
○山椒魚　吸もの　串焼き　こくせう
(何れも皮を去り用ゆ)
○まがめ　すひもの　さしみ　(石亀も同じ)
他は略す

小説

春風裡

トオストイ作
不知庵主人譯

其三（上）

收獲時の末或る午後、マカアとソオニヤと自分は午餐を濟まして我々が平生遊び馴れた菩薩樹の木蔭に出掛けた。茲は大路に接し、一眸の下に萬頃の黄壤を集め遠く境外に蔚然した森を見晴らす好地である。

セルキイ、ミハイエロウキチはポコロオウスキイに來らざる事三日であるが、此日の午后慥かに來るべき仔細といふは收獲の摸樣を見分ある旨を執事に約束したからだ。

午后二時頃になると一隊の收獲人の喧忙の間をセルキイが馬で乘廻すを見掛けた。マカアはセルキイの好物な梨と櫻實の支度を命じて置て横になり「ハンケチーフ」を顔に當てゝ寐て仕舞ひ、自分は菩提樹の枝を折てマカアを煽ぎ、セルキイが來るべき道筋を一心に打守り、ソオニヤは切株に腰を掛け、木枝や草を束ねて人形の家を建てゝゐた。

其日は暑氣強く折々遠雷の隱々として微かに響を聞き、地平線を限取る一簇の黒雲を排て電光の鍵の如く閃くを見た。

大路を沿ふて山の如く穀類を積める車は幾輛となく軋り、穀倉に運んでから後農男は空車の上に突立ち鞭を劉々としごき長袗を風に靡かせながら、再ひガタクリさせて歸り、遠く田園を望めば喧然たる人聲聞え、數多の農婦が黄色の麥稈を束ねるさまは遙かに境外の蓊鬱たる暗緑の森に對して浮彫の樣で、我が眼前の風色は宛から秋風の吹き初めたる暮夏の景である。

で、斯くの如く人は忙がしく汗を流し塵に汚れてある間に、マカアは軟かき更紗の帛布を顔に掛けて眠り、黒く熟して水氣滴るばかりなる櫻實は皿に堆くして飢人の唾を飲込ませ、古代形の硝子の壺に盛りたる氷塊は日光に映じて七色の虹をなし、自分は徐ろに夏の日の熱きをも忘れてゐた。

『眞に幸福だ…斯して氣樂にして居られるは何のお庇蔭だらう』と自分は心中に思つた、『如何して此幸福を裾分しやう？』

太陽は菩提樹の森に隱れ、圃の塵埃は沈ちついて、遠き一

連の岡は入日と共に紫色に變じ、近き森の邊には堆く收穫の山を積み、穀類を積める車は既に去り、今まで其喧然たる間に身を粉にして稼ぎし農男共は叉杷を肩にし麥の穗を帽子に着けて鼻唄を唱ひながら家路に戻つた。しかしセルギイ、ミハイエロウヰチはまだ來なかつた。

不意に、自分が待受けた道とは全く異つた方角から渠の背高い姿が現はれて、晴々しい面地で自分の方に向て進み、マカアの熟眠してゐる躰を見て唇を緊と結び、自分に頷いて輕く會釋し、爪尖で音のしない樣に歩行く、其容子を見て自分は早くも機嫌の好い事を察した——此機嫌の好い時を自分共は渠が『狂喜』した時と目してゐた。

『今日は！ 如何だエ、菫艸さんと』自分の手を握んで渠は訊ね、直ちに自分の應對に答へて『有がたう、今日は恰で十二三の兒供になつて馬に乘つたり木に登つたりした。是はさうと…何だツてマカアの鼻を苦める？』

と云はれて氣が附くと、マカアの顏を蓋ふた布帛は何時の間にか取れて、自分が折ッた菩提樹の枝が恰も其鼻の上に落ちて、自分は思はず吹出し『なに、鬪ふもンですか、マカアは屹と起きると…寐込ンぢやアゐないと云ひまさアネ』と低音で耳語いたはマカアを起すまいと思つたからでなく、極睦じい親朋の調子を用ゐて見たかッたからで。

セルギイは櫻實の皿を手に取り、ソオニヤの遊び場に行き、ムザと人形の席に坐したから穩ないソオニヤは怒り出した。セルギイは一向平氣で荐りに調戲ひ、ソオニヤは櫻實を呉れぬから御立腹だと云て弄ッた、しかし二人は間もなく和合くなつて一緒に此櫻實を喰べた。

『最少し取て來て貰ひませうか、それとも取りに行きませうか？』

渠は返事を爲さで直ちに皿を取り人形を其中に入れて煖爐の方へ行き、ソオニヤは其跡を追ッて上衣の裾に取附き人形を返して呉れとせがンだ。（露西亞にては網にて屋根を張りたる煖室に草樹を培養する也）『どうしても菫艸だ』と渠は云つた『今日も此近所へ來ると菫の香がプウンとした、それが煖室の菫の蒸せる樣なンでなく、トント春の頃雪の解ける下から微かに薫る樣に品よく何とも云へぬ香が……』

『收獲の樣子は如何でした？と自分は波立つ胸を押し靜めて

何氣なく訊ねた。

『極好結果です。みんな正直者で能く稼ぐから收穫も格別有る』

『左うですチ。貴君がゐらッしやる前に私もつく〲さう思ッた、本統にあァやつて汗しづくを流して稼ぐ人があるかと思ふと、斯うして氣樂にぼンやり暮してゐるのが耻かしくッてチ』

『そンなもッともらしい事をいふもンぢやァない、どうして貴孃達に百姓の苦が本統に知れるもンか……それはさうと櫻は何處だ』

煖窖は戸が閉められて庭男が此邊に一人も見えぬからソオニヤは鍵を取りに行ッた、しかしセルギイは待兼ねて塀を越え屋根の綱を除けて其下にくゞッた。

『櫻實が欲しけりやヤ皿をお出し』とセルギイは云ッた。

『いゝえ、あたしは自分でツマむのが好きなノ。どれ鍵を取て來ませう……ソオニヤには分るまいから』と自分は答へた。

しかし自分はセルギイが人のゐぬ間の容子を見たく、堪らなくなッたので、そッと爪尖立てて煖窖の向ふ側に行き、積重ねた空俵の上に乘ッて、旨さうな黑い實の重さうに生つてゐる節瘤だッた葉木で充滿ッた家を覗き込むと、セルギイ、ミハイエロウヰチは眼を閉ぢ帽を取て或る古木に倚れてゐたが、頓て慥に自分は立去り、一人も見てゐる者がないと思ッたらしく傍の切株に腰を掛け、指の間に護謨を轉がしてゐたが、突然肩を搖ぶり眼を開き微笑と共に一語を洩した。此一語は非常に自分を驚かし、深く此間牒的の擧動に慚愧した、といふは何でも『カシヤー！』といふ樣に響いたらしかッた。

『左うぢやァないと』自分は心に思案し直したが、其途端に渠は前よりは一層物軟かに繰返した、可愛いカシヤー！』

正しく手に取る樣に此言葉は聞え、自分はクヮッと上氣し動氣遽に劇しくなりて思はず下に落まじと壁にしがみ附た。

が、此時セルギイは氣が附いて自分をふッと見上げて赧然とした。目と目は互に見合せて自分も嬉しく莞爾笑ふと、セルギイも滿面に喜色を張らして自分の笑顔を迎へ、相方共に暫らく忻然たる面地であッたが、セルギイは最早唯深切なる老伯父でなく、自分を愛し且つ畏敬する人の如く、自分も亦セルギイを愛し且つ畏敬した。

一二分間は一語も交さずにいたが、頓て渠は眞面目になッて、唇に浮べた微笑も兩眼の麗かな色も消え失せ、トント何か悪い事でもしてゐて、セルギイは漸く之を悟て、無理に抑へ付けやうとする樣に、兄弟の如き冷心をもて自分に向ひ、『お下りなさい、下りないと怪我をします、第一髪を梳つけませんか、何ンて云ふ風です』

自分の感情は滅じ『何故態とあンな事ゥ云ふンだらう』と思ッたが、どれほど自分の勢力があるか、渠を試す氣になッて、

『あたしは櫻實が摘みたいノ』と云ふと同時に手近の枝に手を掛けてヒラリ煖窖の中に飛込みセルギイの前に突立ッた。

『馬鹿な事ゥする』とセルギイは云ッた。實際自分も飛込みは飛込ンだが頗る不快な心地がした。

『怪我ァしやァしないか』と渠は言葉を續けた『如何して出る積りです』

渠は前よりは一層迷惑した容子で、自分も其景色を見て心中頗る安からず、何だか極り悪くなッて、顔赤らめて言ふべき術も知らず、木實を摘ンで見たが器物を攜へざれば入れるものもなく、竊に後悔して自分で自分を叱りつけて見たが或は此無考の擧動がセルギイの賎視を來たしはせぬかと心配し、セルギイと共々に當惑の色を表はして暫時は默然として顔見合せてゐたが、その內ソオニヤが鍵を持參して自分共は釋放して呉れた。が二人共互に言葉を交さず唯ソオニヤに向てのみ話しかけた。

一首十躰の歌

ほの〴〵とあかしの浦の朝ぎりに島がくれゆく舟をしぞ思ふ。

ほの〴〵と島がくれゆく朝ぎりに明石の浦の舟をしぞ思ふ。

ほの〴〵と舟をしぞ思ふ朝ぎりにあかしの浦の島がくれゆく。

ほの〴〵とあかしの浦のあさぎりに船をしぞ思ふ島がくれゆく。

ほの〴〵と島がくれゆく朝ぎりに舟をしぞ思ふあかしの浦の。

あさぎりに島がくれゆくほの〴〵と明石の浦の舟をしぞ思ふ。

朝ぎりにあかしの浦のほの〴〵と島がくれゆく舟をしぞ思ふ。

あさぎりに舟をしぞ思ふほの〴〵とあかしの浦の島がくれゆく。

朝ぎりに船をしぞ思ふほの〴〵と島がくれゆくあかしの浦の。

あさぎりにあかしの浦のほの〴〵と舟をしぞ思ふ島がくれゆく。

閑書

有志の諸姉に御相談の件二ツ三ツ

田舍の一女子

一たび進めば一度退き、茲に伸ぶれば彼處に抑へらるゝは、世の常態上然るべからざる事にて候へ共、此數年來女子社會の狀況は如何に年々靜穩に、否寧ろ無作業無元氣とも申べき姿にのみ陷り行き候事にて候や。洵に歎息の至に堪ざる事にて御坐候。幸に去冬ウエスト女史の渡來あり、又矯風會姉妹方の御盡力にて集會政社法刑法の改正なんどを衆議院へ御差出しありたるなどにて、婦人社會運動の命脈は未だ全く絕滅したるに非るものなるとを、一般の國民にも知らしめ玉ひたる事にしあれど、是等は只平素かゝる事に注意せる一部同胞達の記臆に止まり候のみにて、まだ全躰の日本國民をして正しき婦人の呼び聲に耳を傾けしむるとの中程には參らざるやに思考せられ猶且慊らぬ心地致申候。然れ共何事にてもあれ、一事を企て又は一運動を爲さむとするには、隨て種々の障碍もあり、又いろ〳〵の準備をも要するものにて候へば、假令心には思ふ共容易に實行し難きものなる事は、經驗に乏しき私共の如きものとても略承知する處に御坐候。然れば强ち無責任の壯言大語をのみ放ち、己れの無所作無元氣を顧みずして、姉妹方をのみ偏に譏り奉るには非るも、世の狀態已に非なるを見、又一方に我同性の婦人社會寂として聲なきを思ひては實に痛恨の至に堪へず。敢て分を忘れ班を超へて書を大方有志の諸姉に寄せ參らす。今や花は紅に柳は翠に、鳥は朗らかに歌ひて遊意をのみ誘ふの時にて候へ共、正義の聲と道德の光とは依然秋風落日の天の如く、纔なる響、微なる影だに保ち難たる姿にては候はずや。此時此際假令花雲に對し薰風に浴し候共何の樂か御坐候べき。思へば東台の花も嵐峽の水も鄙猥なる絃歌と酒奴に汚さるゝのみに御坐候。是等の一斑を觀察致し候ても、婦人として働らくべきの事柄は多々背後に迫り居候を相覺へ候。幸に身都門の裏に在り、將又爲すあらむと志し玉ふ諸賢姉よ此一陽來復の機に乘して、婦人社會の元氣を作興し玉はむとを伏て願上候

序ながらかゝる事を企て玉ひては如何哉と思へる事を一二左に

一女學圖書館若くは之れを小にしては女學書籍店の如きものを設けて、有志の婦人自ら女主人公となり、館內の事務を採るもの悉く婦人のみを以て之れに當らしめ、以て一方には女學女文の發揚を計り、又以て女性の來觀者購買者に便益を與へ、之れと同時に自分は女性の事業界に一新生面を開くべき事

一女子俱樂部を設けて以て高尙なる遊樂會話の場と爲し汎く女性間の親交を圖るべき事

一女子勸工場を設け以て女工を勵まし又有志の女子自ら之れが販賣の衝に當り以て女職女買を振興する事

一感化愛護の精神を以て旅館下宿業等を營み有志婦人自ら其任に當る事

是等の事は既に注目着手し居玉ふ諸姉もあらむが、日今の時勢上一層切要ならむと思へるまゝに附記致し候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝

案山子廼舍東京社中歌結

○一番　雨中柳

左　湯谷磋一郎

風やみし遠山本の柳原かすむとみれば春雨ぞ降る

右　江間喜代子

もえそめし柳の絲に露見えておぼろ月夜に春雨ぞ降る

左は風やみしとあればやむまでは風のふきたるさまも見えたらんしかも遠山本とありては打なびくけしきの見ゆべくもあらぬやうにも打おもはるればむしろ初五をあし曳のいひたらんこそましならめ尚も風やみしといはんには第二句をむつたの淀のとせばやゝまさりなん　右はうつくしき姿の惜むべきはまとすくなきやう也そは露見えてとは夜ならば秋の夜のさやかなる月影にいふべきはしきにて朧月夜には實景にうときやうなれば也若しもえそめし垣根の柳露おちてとせば勝ならんとてはふたもとながら稍もつれたる柳の絲のいづれにひかれん點者は道の左のほとりに生れたる柳のかげによりて行んとぞおもふ

○二番　夕歸雁

左　高原照彦

こしの海のあらき波路の夕和に霞める空を歸る雁かね

右　市村高彦

月影も匂ひ初たる夕ぐれの霞の中をかへるかりがね

左右の詠者のふたりは眞の詠常に同等にして優劣をわくるは難きのみならず其の詠の性質も亦相似て從兄の間也とかれておもひ侍りしをよくも爰に取組給へりされぱこそ優劣を定めんはくるしからめしひてわかたんにはあらき波路よりも月かげのにほひそめたる夕ぐれの空は春の雁の景情にかなひていとなつかしくや侍らん

○三番　水邊梅

左　北里闌

打いれん淺瀨やありと駒とめて見渡す岸に梅咲にけり

右　津田元親

澌氷半とけたる池水にうつるもゆかし梅のはつはな

左歌才子とみたる人の詠にしてはすぐれたりといはれねど三十分にはよくよまれたりとせむ別に難とてはなきも題の心より見れば水邊のけしき多きかはりに梅の景情たらぬ心地す右の詠者は七八年が程も多忙なる米國の商社に過しさまにも似ずよく天然の景をうつし給へり若し類歌なくば此方水邊のけしきも梅の景情も稍かにあらはれて無疵の勝とや申し侍らん

雜録

米國に於ける下婢（上）

ふみ子

昨年まで凡そ三ヶ年間ほど、米國桑港に留りて、下婢の勞働をなし來りたる某婦人あり。予は先頃其婦人に就て米國に於る下婢の經驗談を聞き得たれば、大方諸姉が參考の一助にもと左に記する事とはなしぬ。

下婢の給料

は凡そ一週二弗より五弗までの相塲にて、其給料の多寡は其主家の用務繁閑と、下婢其人の受持つべき勞働の區域の如何とに依りて、定めらるゝなり。概してはクックを兼ぬるものは給料多く、單に家内の雜務のみに從事するものは、其給料少なきなり。

被雇期限

は一定の標準なく、其約束と合意の如何に依りて種々の差違ありと雖も、要するに日本に於る習慣の如く、半ヶ年若くは滿一年なんどいへる長時日の約束はなく、主に一週以上一ヶ月位の約束にて雇はれ、其上更に其時日を延ばすこともあるなり。(日本に於ても東京は既に月給を以て下婢の給料を定め隨て其約束期限も亦短少なれど、京坂地方其他の田舍に在りては、半ヶ年を以て最短期となすなり。世間の事務繁雜となるに隨ひ、下婢の出替りも亦頻繁となるものと覺し。)而して日本に於る多くの地方は、一主家に多年使はれ居たりといふ經歷ある時は、次の主家の信用も得易く、其他勝手を覺へて働き能きなどいへる利益もあるを以て、成るべく一主家に少しにても多くの間雇はれ居らむと力むるもの多けれど、米國に於ては夫れ等の事を企望するもの少く、否寧ろさる企望を有するに遑なきと、又其前主家に於る被雇期限の長短が、日本に於る或る地方ほどに關係を有すると多からざるとを以て、假令或る主家との約束期限内なりと雖も、他に夫よりも多くの給料を出さむといふ主家あるか、若くは其他何等かの意に適せざる事情ある時は、公に其事由を告げて、主家を替ゆるとを躊躇せざる風習なりといふ。故にかゝる塲合に於ては主家も亦下婢が陳述する所の理由に依り、其望みを達する

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

か、或は其解傭の請求を容るゝか、二者其一を擇みて決するなり。要するに主家に於ても下婢に於ても、日本の如く他の事情に托して暇を乞ひ若くは出すといふが如き事はなく、双方共に明らかに其事情を述ぶるを以て却て快き事となし居れり。故に本日甲家を辭して、翌朝は既に其隣家に雇はれ居るとも爲に其感情を害するといふが如き事はなきなり。ツマリ何事に限らず一時の口實を以て傭を解き、若くは解かれむとはせず、双方の合意に依りて決すればなり。

紹介の方法

は矢張日本の如く雇人口入營業といふ如きものあれば、此營業者の手を經て雇はるゝも可なり。又新聞に廣告して雇はれ口を搜がすも可なり。日々の新聞の廣告欄に目を注げば、雇ひたきものと、雇はれ度ものとの廣告は、幾個も目に觸れべきなり。而して何れも其注文の價條は附記しあるべければ、夫れに依りて雇はれ度ものは、其主家を豫め撰擇し、此處ぞと思ふ方に行きて聞き合すなり。口入屋の手數料は凡そ給料の一割位を拂ふべき標準なり。又新聞の廣告料は、其新聞に依りて多少の相違あれば、何程とは明言し難きも、凡そ廿五錢ほどなり。口入營業者とても、日本の如く保證人の地位に立ち與るゝものにあらず、ほんの紹介に止まる事にしあれば、新聞の廣告に依りて紹介せらるゝも同様なり。故に何れの方法を取るも大なる相違はなし。寧ろ新聞の方便利にして且其効多からむ。

下婢の仕事

は其の家に依りて多少の相違あり。又一人の下婢のみを雇使する家と、數人の婢僕を傭使する家とは素より其の用事の種類に相違あるべき筈にて、數人の雇人ある家には、自然分業の法備はり居れば、下婢の仕事も從つて其の種類少かるべきも、米國に在りては、日本にて所謂中等の上位に相當する家にても、一人の下婢を使ふ位に止まるものなれば、茲には其の一人の下婢を使用する家に就ていはむに、矢張日本の如く家中の掃除より飲食の準備衣服の洗濯等凡そ中等以下の細君が爲さむほどの事は悉く下婢の手にて爲すべき仕事とはなり居るなり。而して日本の如く、下婢と細君との仕事の區域分明ならざるやうの事はなく、下婢が負擔すべき筈になり居る仕事は、全く下婢一人にて之れに當らざるを得ざるなり。然

る代りには毎日下婢が爲すべきだけの仕事を爲し終りたる上は、下婢自身の爲に其殘りの時間を用ゆる事も亦隨意なれば、日本の如く一用終れば直に又他の負擔外の用事をも命ぜられて下婢は終日主用に身を捧げざるを得ずといふが如き事はなしといふ。

今昔もの語り

秋玉庵輯

○細川越中守の金言

むかし或る大名細川忠興に胄の物數奇を頼みたるものあり。忠興依て其使者に書附を認ためて渡しけるに。使者一覽していへるやう胄の立物下地桐の木に御座候、桐の木はいと折れ易きものにて候へば、戰場にて折れたらむ時誠に見苦しかるべく候、其邊はいかゞにやと申ければ。忠興以ての外機嫌を損はれ大喝していふやうさて〳〵武士の作法に疎き云ひ樣かな。戰場に臨まむほどの者は、命二ッ持てやある。貮つなき命さへ擲ちて何とも思はで出る習ひなるに、何とて立物の折るを厭ふべき。只輕きをこそ尊ぶべきに。若し折れたりとても立物の折れるほど働きて何の見苦しきとあるべき。却て一際面目にてこそあるべけれといひしとぞ。之れを彼加藤肥後守忠廣が、我は大力になりたく思ふ。其は重き具足二領重ねて軍に出る時鐵砲の恐ろしきとなきやうにしたき故なりといひしに比ぶれば恰も霄壤の差あるにあらずや。武事に限らず、事に當りて働らかむと欲するほどの者は、何人も此忠興の如き覺悟をこそ持たまほしけれ。

○江戸の茶屋

むかしの江戸、今の東京市中には、待合とかいへるものゝ數市中の米屋よりも多しとは目今の景況なるが、這は世事進化の現象として喜ぶべき事か、將又却て其裏面には悲しむべき事情の潛むものあるかは姑く玆に論ずるを措き兎に角世情變遷の一側面よりしてのみ窺ふ時は、實に昔時と大なる相違を來せると驚くに堪へたり。或る古き書に記する處を見れば、三代將軍家光公の時代には、江戸中茶屋と稱すべきものは、近世の如く珍重なる食物などを調へて出す所ありしに非ず、明曆の大火後に至り、淺草金龍山の門前に始めて茶屋に茶飯豆腐汁煮染め煮豆などを調へ、奈良茶と名付けて出せしを、人々大に珍しがり、江戸のはし〳〵のものまでも、金龍山の奈

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

良茶喰ひに行かむとて態々歩を運びし程なりしが、其後追々美膳の店までも出すものあるやうになり行き、何日しか彼聖天山下の奈良茶は、衰微に及びたるなりと記しあり。近世の江戸は茶屋といふもの惟り美膳を供するものゝみに止まらず。いふに忍びざる營みをさへなすものあり。世の進歩は寧ろ或る意味に於ての退歩か。思へば開けぬ昔の世こそ慕はしけれ。

○家康の教訓

洋の東西を問はず、時の今古を論ぜず。人に卓越したるものの至言は、往々其意味を一にするとあるものなり。家康が住吉の神詫宣なりとて、人に教へたるものなりとて傳へ記したるものを見るに其言に曰く。我に神躰なし慈悲を以て神躰とす。我に神力なし正直を以て神力とす。我に神通なし智惠を以て神通とす。我に奇特なし無事を以て奇特とす。我に方便なし柔和を以て方便とすとて、

慈悲の眼に憎しと思ふ人ぞなき。罪のある身は猶不便にて

とあり。又常に人に諭して、惡逆は私慾よりいで、天下の亂は驕奢より起るといひ、其他家康の教訓として世に遺せる言甚多し。德川十五世の太平は實に偶然に非じかし。

笑ひ草

地理學の教師

みなさんコロンブスの功名がどれほどだといふとが分り升か。その人の廣大なる發見がないと致せば、西半球は丸でないものです。

末席の一人欠伸をしながら、

先生、併しさうだと地理は今の半分で濟升。

ある片田舍の萬やで彗星の話しが出て居り升た、其中瀬戸の伴作どんが

おらあの彗星の出た時ひと晩に千も二千も星の飛ぶんを見たぞ。イヤーどうも大した飛び樣だつたぜ。

東隣の太郎兵衛

そらつちアそれは見なかつたが、さういへばあれからこつちよつぱと星の數がへつた樣だな。なんでも星の數があんまり多くなると空がせまくなるから、なんのこたあねひおらつちが大根うろ抜く樣な譯だんべよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

ふみ子

◎日本全國にて收穫する米は大凡何程であり升う　（肥後いれ子）
△昨廿五年度産出額を農商務省にて調査せし處に據り升と、合計四千百三十七万八千九百五十六石であり升て、是れを前年に比すれば三百二十五万五千百四八石の増額で、又是れを既往の十三ヶ年間の平均産額に比較し升れば、七百十三万四千六百二十四石增額し升たそうです。而して此總産額を粳糯陸の三種に區別致し升れば、

粳米	三七、二三三、二三三、石
糯米	三、七八二、四六四、
陸米	四一、三七八、九五六、

石であるとの事です。

◎日本に限らず何れの國にても、刑事に係る犯罪者の中に就き男と女とを區別する時は、其總躰の人口に對する割合上いつも男子の犯罪者女子の犯罪者よりも多きは何人も既に承認する所であり升が是は主として何等の原因に基くものであり升か。女性は男性よりも幾分か道念を有すると多きが爲であり升うか。　我田みづ子

△成程一應御尤なる御說のやうであり升、けれ共汲に猶能く考へればならぬ事があり升。夫れは日本は勿論他の國にても女子は多く男子に倚りて生活の煩を免れて居り升。尤國に由り、又人に由り升ては女子迚も男子同樣自ら生計を營んで居る者もあり升が。夫れは比較上男子よりも少く又自ら生計を立て居る者と雖も多くは獨身を支へ行くに止まり夫や子供迄をも婦人の手を以て養ひ居る者は多くは有り升ぬやに考へ升。然れ共概て男子の方を見升れば、薄貧小給の者と雖も出來得る限り自己の力を以て妻子を養ればならぬなどの困難もあり升から生活上の責には主に男子たるものが任ずる事であり升。して見れば自然財政上の責任は多く男子に歸する事にてあり、而して其刑事の犯罪なるものは多く金錢上に係るものなるとを思へば大に其過は男子の爲に酌量せればならぬ事です。故に一方に犯罪人の多數は男子にてあるとを思ふと同時に又一方には其犯罪の種類の多數は財物上に係るものなるとを考へ、又其財物を獲取せざるべからざるものは男子耳にてあるとを察すれば、惟り道德上の觀念に就て高下ありとせずして、他にかゝる主なる原因あるとをも考察せればならぬ事であり升。倘ほ他に一ッの原因となり居るとは飲酒家の比較的女子に少なく男子に多き事であり升。何故夫れが犯罪者の多少に就きて關係を有するかといふに、犯罪者の中には酒を飲まぬ者よりも、酒を飲む者多しとの事實があるからであり升。故に其同性中に飲酒家を多く有する男子中には比較的飲酒家少き女性中には其犯罪者も亦少き道理であり升。是亦確に男女犯罪者の數を異にするの、一原因となりて居る事であり升う。尤飲酒と犯罪との關係に就ては少しく込み入たる議論もあり升から是は別項として左に述べ本件の答は右にて一應終へ置升う。

◎飲酒家と犯罪者　さて前項に述べたる如く犯罪者には飲酒家多く、飲酒家は主に男子なるは何故なりやと申升るに、今更に申迄もなく酒は人の精神を昏亂せしむるものにて、又人を怠惰に陷らしむるものなれば、强飲の結果は是非共刑事上の罪を犯すまでに墮落せしめ易きものなるとは看易き道理にてあれ共、犯罪者の中には又平素下戸なるものも已れが良心に背きて罪を犯さむとするが爲め自ら其良心の責に堪へずして、罪を犯さむとするに當り態々酒を用ひて其精神を昏迷せしむるものもあるなり。是其飲酒と犯罪と關係を有するの一原因として思ふべきとなり。而して又今一ッ其遠因に遡りていふ時には多くの飲酒家の中には眞に酒を嗜みて飲用するものと、又然らずして敢て酒其ものを嗜むには非るも、一時の苦憂を消する爲めにとて之れを用ゆるより習慣となりて飲用するものもあるなり而して其苦憂なるものゝ中には、財物上に係る問題亦尠からざるとを思へば、男子に飲酒家多く、又其飲酒家より多く刑事の犯罪者を出すの因に就き大に考察を要すべきものあるならむ。かゝる事柄は世の改革者匡救家たらむ人々は夙に考究せられ居る事なるべけれ共序なるを以て前件の答に附記しぬ。

◎日本に於る産婆の現員は大凡何程あり升か。
△本年一月の內務省に於る調査に依れば、現員千三百九十八人にて其內昨廿五年度中に新規免狀下付の者二百六十七人であり升と。

◎又醫師の員數は
△之れも本年一月の調に依り升と、四萬〇〇九十三人あるそうです。

◎電話交換加入者の總數は何程
◎東京電話交換局にては九百二十五人、横濱交換局に於ては二百四十二人。但此調査は昨廿五年十二月末日の事であるそうです。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

書架

○ウェスト女史遺訓

何人か、ウェスト女史が永逝を惜しまざる可き。然れど、取分け、遺憾の念に切なるは、本邦同志の人々ならめ。茲に其の演説筆記を取集め、之に「遺訓」と題して、永く、本邦禁酒事業の教導となさんとすること、當に然るべき業也。此書、婦人矯風會之を發行し、竹越竹代氏之を編輯す。初に、津田、安藤の二氏並に竹越女史の題序あり、皆よく壤を追慕するの情を寫し出せり。全紙數、百二十九頁。收むる所の筆記は、酒と煙草の害、婦人と矯風事業との關係、日本工業に及ぼす飲酒の弊害、禁酒と工業との關係、閣龍世界大博覽會に於ける米國婦人教育會及び婦人矯風會の計畫、万國婦人矯風會の運動の六篇とす。

○世界博覽會に對する日本婦人

シカゴ府、コンケー會社より印刷散布したる「世界博覽會に對する日本婦人委員」なる小册子を贈られたるを見るに、

初に委員會組織の經歷を說き、次に出品の事、並に出品の品種の事を說き、次に大名奥方の衣裳、及び、衣裳部屋飾付等實覽に供ふる由を述べ、次に日本婦人出品場の坪數等を述べ、次に當日配布すべき書物小册子の事を述べて、先づ其目錄を預告したるを見るに、「日本婦人」なる書には、

序。日本社會に於ける婦人の地位。行政上に於ける日本婦人。文學上に於ける日本婦人。宗教上に於る日本婦人。ホームに於ける日本婦人。職業に於る日本婦人美術遊藝に於ける日本婦人。明治年間に於ける婦人の事業等を記載すと聞く。

○婦人東洋傳道局報告

プレスビテリアン外國傳道會社中の婦人東洋傳道局(Woman's Occidental Board of Foreign Missions)より、第十九年報を出版し、過月吾社に送られたるものを見るに、此局は、十九年前、日本在留の女宣敎師ジョンソン、ギヴリック夫人が、彼地の傳道會議に出席して發議したるより起りたるもの丶由。此回の報告に收めたるもの丶中、我國に關する條には、金澤女學校のチーロル夫人、福井のフルトン夫人、等の記事を揭げ、亦、サンフランシスコに於ける醜業婦人に對し、スメージ夫人が熱心傳道せる事由をも記載せるあり。此一年間の收支金額は一万五千七百九十九弗三十七セントにして、局長は十五年來勤續せるチークランドのブローン夫人なり云々。

○日本女學史の評

下野遼光氏が「日本女學史」に對する批評、何故か餘り多く世に出でず。出でたるうちにては、哲學雜誌第八卷第七十四號(四月十日發兌)に見ゆる批評を以て、尤とも密、尤とも確なりとす。源氏物語に對して僅かに四頁の評を與へ、額田王の爲に唯だ一番の歌を擧げ、矢部正子、村田春梅女の事は小傳をも揭げず、而も、麗女の傳に二十頁を與へたるなど、詳略宜しきを得たりと言ふ可らずと論ずる節など、極めて公平なり。

○繪入幼年歷史

幼年全書の第三編として、博文館より題號の小册子を出版す。幼年者の教師の筆跡並びに幼年者自身の自筆を、此書中の所々に書き込み、又た折々の記事を認ため、后の爲に遺して以て幼年時代の記錄とする趣向にて、面白き思ひ付なり。

○家庭敎育、和漢泰西新智囊

明法堂より出版し、樂水道人の撰著に係る。古今東西の智者が智言智行を簡畧に集めたるもの也。章を十に分ち、上智、明智、深智、深智、捷智、術智、悟智、頓智、黠智、雜智の十種を列して、凡そ一百餘を輯む。唯だ智を研かしむる耳が、家庭教育の主旨にはあらざるべけれど、母たるもの之を參考とし、子供のはなしの料に用ひなば、亦益なきにあらじ。

隨感

密室默禱

○吾等罪あるとを感ぜず

吾に罪惡ありと自から感覺せざるが故に罪惡なしと言ふと勿れ。見よ、身躰に於ける病疾の如何にして生じ亦た如何にして重り行くかを。吾等未だ之を感覺せざるに當りて病の種早く生じ、毫も氣付かざるうちに既に蔓延するにあらずや。心裏の病疾亦如此し。蓋し其の生起するや、理を破れるが爲に由る。肉に於ても、靈に於ても共に然り。故に只だ之を感覺するの有無によりて則ち病の有無を判ずべきにあらざるべし。世人往々揚言すらく、吾等罪惡あるとを覺えず、と。此の覺えず感ぜざる事は、到底以て其無罪の容認となすべからざる也。

○吾等救はれたるとを感ぜず

救はれたるとを感ずるは、救はれたるの後にあり、之を感ずるが故に救はるゝには非ざる也。先づ救主を信ず。此に於てか、救あり。救ありて而して後ち救はれたるとを感ずるを道とす。レパイパルの時節、吾は救はれたりと感ず云々と言ふもの多きは、誤なり。其時吾は感ぜず云々と言ひて悶ゆるは、痛ましきと也。感の有無。何んぞ以て救の有無を判ずべけん。

○吾が改悔足らず

吾が改悔足らず、この故に信仰うすしと言ふは、未だ可ならず。信仰うすきが故に、改悔足らざる也。改悔とは、「意向、思想の革變」なり。之れ、信仰の結果によるとを多しとす。カルビン曰く、改悔の信仰より生ずること、喩へば菓の木より生ずるが如くなるとを辨ぜず、反つて改悔は信仰の前に在りと考ふる所の人は、未だ能く改悔なる者の性質を識らざるなりと。

史傳

山田米子女史行状

女史名は米子、姓は山田氏、岐阜縣武儀郡上有知町の人、父名は萬兵衛君、母は村非氏、女史は第二女なり。明治二年七月四日岐阜市に生る。年七歳岐阜市公立小學校に入り、十六歳にして縣立女學校師範科を卒業し上有知町有知學校準訓導となる。明治十九年七月職を辭し、單身東京に來り、東京音樂學校に入り、同廿二年十二月同校師範科の業を卒ふ時に年二十一。翌廿三年一月山梨縣尋常師範學校助教諭となり、次で舍監を兼ぬ。同廿四年十二月職務勉勵の廉を以て山梨縣廳より賞金を賜ふ。同廿五年九月職を辭し、再び京に上り、明治女學校教師となりぬ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

明治二十年の末女史基督教を信じ、東京下谷メソヂスト教會に於て受洗す、後ち中央會堂に轉す。廿四年十月二十八日濃尾の地大に震ひ弟榮作君遂に非命せしより深く死生の事に感ずる所あり、福音を知らざる者は一日も安處する能はざるを悟りて授業の傍福音の宣傳に從事し、在岐の女宣教師ミス、プレストンを輔けて盡す所甚だ多かりき。而して常に父母の未だ道に入らざるを以て憂とし、書信を以て改悔を勸むるを其數を知らず。山田氏世々造酒を以て業とし、萬兵衛君に至りて八代とす、而して萬兵衛君甚だ酒を嗜み、日に斗酒を飲む。女史又之を憂ひ、萬兵衛君をして酒を斷ち、その業を轉ぜしめんと欲す。時に妹久子君東京に留學し、亦既に基督教を信ず、是に於て姉妹心を合せ、二週日の間朝飯を斷ち、一日のうち時を定めて父母の信教と廢業とを禱る。去年女史歸省し、諄々として理を說き道を辨じ、涙を振ひて父母に勸め且つ請ふ。萬兵衛君遂に禁酒廢業し、次で受洗す。今茲三月萬兵衛君一家を挈げて上京し、地を兩國藥研堀に相して砂糖店を開く、蓋し女史の經紀に出づ。幾もなく女史流行感冒に罹り、腸窒扶斯に變じ、醫科大學第二病院に入る。女史平生少しく心臟を患ふ、是に於て心臟の衰弱を來たし遂に起たず、時に明治二十六年四月十九日午後第十時なり、享年二十有五。越えて二十一日城北染井の墓地に葬りぬ。

女史軀幹長大豬顏にして豐頤性は豁達なれども柔婉に、敏慧にして幽閑なり。甚だ紛華を惡み、凡そ靡曼のもの一切屏けて之を御せず。勸勉にして徒に時を費すを喜ばず、學校放課の後は必ず書を讀み、衣を裁ち、また家事を助く。小より任俠の質あり、朋友の惡童の爲めに屈辱せらるゝ者あるを見れば則ち往きて之を救ひ、仇を窘む。又嘗て客あり、父萬兵衛君に來り、强て面會を求めしに會はざりければ客怒り、將に障を排して室に入らんとす、家人之を如何ともする能はず、女史時に年十一、兩手を展べ障を背にして立ち、叱していはく、此内決して入るべからず、汝何爲者ぞ濫りに我家を擾す、速に去れと、辭色頗る厲し。客大に驚き、呆然として復手を下す能はざりしといふ。

其出でゝ訓導たるに至りては生徒を教ふるに丁寧反覆を極め、諄々として倦まず。生徒の知覺鈍き者あれば教授數回、之に繼ぐに涙を以てす。或は時に快々として家に歸る、家人怪んで之を問へば、某の子某の女記臆なし、教授に苦しむと答ふ。或は欣然として歸り來りいふ、某生今日漸く算術一題を解せり」と。山梨の師範學校に在るや、諸生皆女史に懷き、女史を思ふと母姉の如し、而していはく、山田先生は好人なり、然れども試驗點數の酷なるに苦しむ」と。其教授の懇篤にして嚴正なるを此の如し。

濃の地佛教盛に行はる、基督教多年傳道に從事すれども効果他に比して著しからず、而して上有知の信徒あるは實に山田氏を以て嚆矢となす。女史歸省する每に常に聖書を懷にし、知人を訪ふて道を傳ふ。メソジスト傳道會社遂に月一二次岐阜市より教師を派して教を宣べしめ、講義所設けられ、改信者相踵で起る。萬兵衛君一旦嗜酒を斷ち、造酒の業を廢すと聞くや一市を擧げて驚動し、而して女史の名嘖々として遠近に聞ゆ。

女史姉あり幾子君といふ、勝見氏に嫁し上有知の南二里許の處に住す、女史屢ば書を以て、また親ら往きて基督教を勸む。一日幾子君女史に言て曰く、己れ死せば何處にか往くべき」。女史即ちいはく、死せば則ち天國に往かんのみ。妹は死を怖れず、神命あらば則ち死せん、死は天に往くの門なり」と。二年前生命保險會社に入り、養老保險を爲す。人に語りていふ、妹死すと雖も家資を失はず、老ゆと雖も兒孫を煩はさず。生きて人を煩はさず死して天國に赴く、死の準備妹既に之を爲せり」と。

女史嘗て少らく我家に寓す、一日朝拜の時女史卓に憑りて泣き、久しく首を擧げず、怪んで之を問へば自の薄信を恨み、遂に或は慈母姉妹を救ふ能はざるを悲しむといふ。異日又外より歸り來り、喟然として大息し涙滂沱たり。いはく、今日往きて某校を觀るに諸女生遍々として綺羅を飾り、唯浮世の虛榮を求めて、復一人の國家社會の事に思を勞する者あらざるを悲む」と。女史遂に婦人矯風會に入る、蓋し將に大に爲す所あらんとしたりしなり。

女史既に逝きぬ、知ると知らざると痛惜せざるものなし。明治女學校教頭巖本善治氏は其女學雜誌に、婦人矯風會々頭矢島楫子女史は其婦人矯風會雜誌に永く女子が名を傳へんと欲し、並に狀を予に求む。女史予と相識りて既に久しく、予が二妹亦女史と友として善し、女史予を眄て兄といふ、予も亦女史を視るに妹を以てす、故に頗る其平生を識れり。乃ち其性行履歷を敍述するを此の如しと云ふ、

東京の櫻井成明謹んで狀す。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

通信

淡海子編

●高知縣通信

◎卒業生　本縣人、森岡竹女は女子高等師範學校を、大塚くすを女は同附屬高等女學校を何れも去月卒業せられたり、

◎優等生　高知縣尋常中學校女子部修業卒業證書授與式は昨月末執行せられしが、今優等及皆勤生賞品を授與せられし女生を擧ぐれば、第二級生一等賞太田鶴、第四級生一等賞久保田瑞惠、一級生二等賞島村光、二級生細井龜、香宗我代、門谷未、皆勤一級生山田加滿の諸子なりし、

◎高等女學校　尋常中學校女子部廢せられ、愈高等女學校新設せられ、校長には大石監二、教諭には松永信嗣、茨木定與、安藝牛五郎、西山實和、猪野永和、の諸氏にして此外、多田三九、伊藤乘興、水野政の三氏は雇教員を命ぜられ、久松保衛氏は書記に森澤菊吾氏は舍監を命ぜられたり、

◎中村千賀女史　高知市中島町中村女子手藝傳習所教師、中村千賀女は豫て東京高等師範學校教師、渡邊辰五郎氏より裁縫の件に付度々上京すべき旨通信を得たるも、教授の都合によりて其招きに應ずる能はざりしも、爾來裁縫進歩の趣きを傳承せられたるに付き縣下女子の爲め上京を決心し、上京中は同教場を卒業生なる助手吉田富貴、森龜の兩女に依賴し凡そ一ヶ月間の滯在にて和洋服裁縫及造花編物の採色法等を研究せらるゝ由、

◎高等女學校開校式　此度新設の本校開校式は去る六日午前九時に擧行せられたり、大石校長の演說、野尻書記官の祝詞、松永教諭の演說、生徒惣代太田鶴女の祝文等ありいと盛會なりし、

◎淑女代議士を招く　長岡郡大埇村婦人會は、去る十日武市代議士を招待し一場の談話を乞ひ、終りて茶菓を饗應せられたる由、其出席女子は四十有餘名なりしと、

◎裁縫教師　高知婦人實業會にては、江口幸女久しく裁縫教師たりしも此度辭職せられたるに就き、小栗誠女を其後任に囑托せり、

◎タウド孃歸國　同孃は久しく高知にありて女子傳道學會を擔任し居られたるも、近來大に健康を害し爲めに學會も休業に立至りたるが、此度愈攝養の爲明年秋期頃まで歸國せらるゝ由、これが爲め學會は來年秋期まで休會し各學生中傳道に堪ゆる者は專ら傳道に從事するに至りしと、

●三重縣通信

◎「レッナ」孃久しく四日市基督教會に働き居られしし、「レッナ」孃はこたび神戶に働かるゝことなり、過日出發せられたり

◎津市女學校の開業　豫れて記載したる如く、三重私立女學校は養正學舍への合併の協議纒まりたるを以て、更に之を津市女學校と稱し元の女學校を充用しいよく去る十日より開業せり、その教則は頗る完全なるものにして、寄宿舍の規律の如きは嚴正なると、凡そ全國第一等の位置にあることゝ思はる程なり、且つ簡易科あり專脩科ありて、生徒の服裝等は尤も質素を用ひ、聊かも美飾に屬するものは充分に之を取締まるよし、因にいふ同校の裁縫及刺繡科にては絹布綿布の差別なく無代價にて依賴に應ずる由、

◎津市女學校々長　養正高等小學校長、川村寬氏は津市女學校々長に推薦せられね、

◎養正高等小學校の女生徒　養正高等小學校は教場狹隘を告げるにより、女生徒百餘名を津市女學校の教場を借り受け之に移し日々授業し居れり、

●福井縣通信

◎南越基督教靑年會の討論會　は此程開會し禁酒廢娼孰れを先きにすべきやに付、甲論乙駁双方言辭を盡して論辨を戰はしたるが、最初は充分廢娼論の勝算ありしも、採決に及んで一名の多數にて禁酒論者の勝利となりし、

◎田所いさ子　非職高等師範學校訓導田所いさ子は、此程本縣高等女學校助教諭に任ぜられ三級俸を給與されたり、

◎高等女學校　今回同校に於て卒業せしものは二十四名ありしが、其內廿二名は小學教員志願者に付、今後六ヶ月實地演習を爲し而る後始めて全科を終りたりとするの規程なれば、未だ純然たる卒業と云ふ能はず、唯だ教員志願にあらざる左の二名は今回卒業したるものなりと、

福井市　上田サホ子　丹生郡　松谷ゆき子

◎入學試驗　高等女學校の募集に應じたる入學志願者は各郡市にて三十八名あり、其入學試驗は去る五日より同校に於て執行し各郡の分は（足羽、吉田兩郡を除く）其試驗問題を各郡役所に送附し置き、郡役所に於て同時に執行の筈なりし

◎美談多し　此通信には斯く美談を通信し得るは余の最も名譽とする所なり、縣廳に於て左の褒賞を與へたりし、

福井縣越前國敦賀郡愛發村大字杉箸中川治郎衛門妻

橋本りん

資性篤實幼にして父を失ひ母に事へて至孝慶應元年二月中中川治郎右衛門の妻となり爾來貞操を守り克く其姑に事へて孝養怠らず茲に二十有八年志行一日の如し洵に奇特とす依て其爲賞金二圓五十錢下賜

●横濱通信

第二回日本醫學會員七百名フェリス女學校を參觀す

過日東京にて同會を開きたるより全國會員の上京を機とし橫濱市內醫師申合せ去る十一日同會員一同は招待し當地に於て見るに足るべき水道工事下水工事獨乙病院等へ案內せられたるが山手フェリス女學校の校舍は病院などの建築の上參考となるべき者ありとて參覽することなり同校は之を歡迎したりとて同校にては參觀

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

者一同へ茶菓の饗應をなし更に生徒をして同校にて授くる體操を演ぜしめ以て同校が如何に生徒の體育に注意するかを示したり同日校堂に集りたる人數は凡そ七百名にして　始め同校教頭星野光多氏校長及び職員一同に代りて參觀者の來意を謝し佛人デルサルテ氏創始の體操は全身を開發するの特徴あることゝ最も女子の體育に適したることを略述し後一時餘り實地演説習あり終つて參觀者中醫學博士片山嘉國氏は起つて一同に向ひ拍手して同校の好意を謝するの動議を提出し一同之に和し百雷の落ちしが如き喝采をなし一同散會せり其後東京本會事務所より左の如き鄭重なる禮状を同校長プース氏へ送りたりと云ふ

薰啓陳は今回本會開設に就き特別の御賛助を蒙り且參觀の節は有益なる女子體操方御實示御説明を辱ふせし段一同深く感謝致候所に御座候右不取敢御禮申述度乍略義寸楮捧呈仕候草々謹具

第二回日本醫學會發起人一同

フェリス女學校長殿

●岩手縣盛岡通信

東北生

◎岩手基督教青年會　同會は一時退歩の有樣なりしが、昨夏ピアソン氏來盛以來同氏の一方ならざる盡力に依り、會則を改め浸禮教會牧師市川澂氏を會長に推撰し、新に會館を當市肴町に設け、目下直接事業として、會館内に英獨語學會を設立し、ピアソン氏を是が教授とし當市有志の學生を教導し、並に新聞雜誌縱覽場を開き大に公衆の注目する所となれり、目下會員三十餘名何れも熱心協力して縣下の精神的改革に盡力せり、尚ほ廣く會員を募集せんが爲め、毎日二回演説或は説教會を開き着々運動しつゝある由、思ふに后來益々有爲の會となるや期すべきなり、

◎盛岡に於ける禁酒會　は頃日基督教内有志の組織する所となり、仙臺禁酒會の連絡を通じ盛岡支部と稱し、市川澂氏部長たり氏は專心一意該會の爲めに盡力せるを以て、今や會員百餘名に達したり、尚ほ偏く會員を募集せんが爲め事務所を内丸に設け專ら運動しつゝある由し、因に云ふ同會は今度新に名稱を東北禁酒會と改め曩に設立せられたる岩手禁酒會と合併して、盛岡に一大獨立の禁酒會を起すと、當局者は頻に奔走しつゝある由、

◎基督教共勵會　同會は美以教會内有志の組織する所となり、設立后日尚ほ淺しと雖ども今や會員二十余名に達し、各自擔當部、傳道部、慈善部、矯風部の三部に分ち、何も熱心に盡力しつゝある由、尚ほ毎日演説或は討論會を開き時々問題を討究し或は講師を聘して是が講演をなしつゝある由、將來多望なる會なるべし、

●仙臺通信

◎生徒の寄贈　仙台東二番町高等小學校を卒業したる女生徒一同より、紀念として六尺四方の毛糸卓子掛を同校に寄附せり、但し卒業生は三十五名なりと、

◎田中師範學校長　田中敬一氏は、東京女子高等師範學校教授に榮轉せり

◎仙台慈善會　同會は六十余名の會員より成る、此度會員の遺族へ惠贈金をなさん爲め臨時會を開會せしと云ふ、

女報

淡海子編

●皇后陛下の美術展覽會へ行幸啓　行啓の義を佐野同會頭より豫て請願中の處、目下氣候不順の折柄なれば、來月中旬ならでは行啓の御沙汰はなかるべく　皇太后陛下にも御歸京の上は行啓在らせらるへしと承はる、

●婦人共立育兒會總會　去る廿五日午後一時より小石川砲兵工廠内後樂園に開き、有栖川總裁殿下にも御臨席あるよし

●大日本婦人教育會　同會は去る廿二日鹿鳴館に於て例會を開き、築地別院の布教者小野島行薰師日本女子と云ふ演題にて一場の演説を爲したり、當日は、總裁閑院宮御息所、會頭毛利公爵夫人を初め高貴の夫人令孃數多出席者ありしと云ふ

●大日本婦人衞生懇親會　去る廿二日午前十時より芝離宮に於て同會の春季懇親會を開きたり、此の日夜來の雨晴れ天氣好かりしを以て、或は馬車を軋らし、或は人力車を飛し參集せし人々は、總て二百五十餘名各自隨意に御園内を拜觀し、十二時休憩午後一時三十分、總裁小松若宮御息所殿下御臨場在らせらる、餘興には鹿倉錠子及び少女杉野ます子の劍舞あり、終りに如燕の講談あり得意の忠臣藏銘々傳の一談を一席辨ぜり、斯くて一同歡を盡して散會せしは午後五時なりき、

●跡見女學校の卒業式　跡見女學校にては、去十六日紅葉館に於て卒業證書授與式を擧行せり、同校生徒二百餘名着席するや、同校長花蹊女史は祝辭を述べ、卒業生總代佐藤利尾子の答辭、加藤玉枝子の英語演説等あり、尚ほ餘興として同館の手踊ありて盛會なりしといふ

●三谷すみ女の貞操　島根縣安濃郡波根西村の、三谷すみ女は當年三十四才にして小供五人を有し、家内七人にて詫敷暮しをなしけるが、其夫伴六は八年前より劇しき病を患ひ家計を營むと能はざるのみか坐臥にも不自由なれば、貧は一日一日と迫りて家内七人飢寒に叫び見るさへ憐れなる姿なるに、すみ女は此に心を起し女ながらも氣を勵まし、夫の病は子供に托し、已れは朝な夕なの差別なく吹き寄す風に事ともせず捲き來る雪も打破り、小使、飛脚に頼まれて我を忘れて、一心不亂に立働き貞操正しく、一筋に子供と夫を養ひける、其甲斐もなく、夫の病勢は日に重り熱度高まり火の如く、遂に狂亂病を惹起して妻の苦しみ子の憐さも何も念頭に掛けざるのみか、叱責打擲一方ならず、甚しきは汚穢物等を妻の面部へ塗り付くるなど得もいはれぬ暴動なるにぞ、實家親戚のものどもは之を見るに堪へ兼れて、兎まれ角まれ出て來いと言葉を盡して諭しければ、すみ女は重れて心を痛めて言ひけるやう、女子の戒めは唯二夫の面を見ざるにあり、況して妾今病夫に反背きて出でしならば、看護其の人なきのならず殘る子供を何如にせん、其の餓死せんこと必然なりと涙に咽びて聽き入れず、唯朝夕神に祈り佛に念じ夫

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の快愈を待つ程に、家業を勵みて働けば聞く人誰か感ぜざらん、村內一同協議の上日十錢づゝの手當を與へ、之を昨年創設の產婆學校に入れけるに、すみ女は目出度卒業せしかば年々若干の給金を與ふるとなし、更に此由を縣廳に具上して其貞操を旌表せんとせしも、すみ女は痛く之を拒み、妾の夫に事ふるとは元より人の妻たるべきものゝなすべき道をなしゝのみ、難きを行ひたるわけにもあらず、斯樣のとを貞女として仰々しく具上せらるゝは妾の本意ならずとて、赤誠盛していひけるも有志の輩は尙ほも止めず、昨今切りに之が手續をなしつゝある由

（大日本教育）

●高等女學校の經費寄附金　京都府立高等女學校は、去る明治廿年以來大谷派本願寺より年々二千圓の寄附金を得て維持し來りしが、廿六年度より右寄附金を謝絕せられしを以て、府廳當局者は大に苦慮し今後の維持法を講究し居りしが、遂に本派本願寺より三百圓、千田府知事より百圓、三井家より三百圓、大谷派本願寺より五百圓を寄附し、尙ほ同校長以下教員よりも應分の寄附金を爲して維持する事と爲れり、尤も當局者は本年の通常府會へ同校を地方稅經濟へ引繼ぐ事を附議し、廿七年度より市郡連帶の地方稅を以て維持せん考案なりと、

●女鑑　荊棘の中芝蘭玉樹を生ずとも評すべき世にも稀れなる美譚を斯かる一小街衢に得るといふは最とも奇しき限りと謂ふ可し南閉伊郡大槌町字須賀町に住む越田たか（三十七）は元來貧家に生て艱難辛苦の中に育ちたる者なるが、天性至て孝心深く十七八の頃より一家を相續して辛苦の間に老の兩親を養ひ居たる內、去る明治十四年の頃ある人の媒妁にて同郡兩石村より新兵衛（年齡不詳）といへる者を婿に貰ひ夫婦となりたるが軈かて間もなく續けて四人の子を儲けしかば、さなきだに貧しきが上の多人數なれば日々の糊口に追ひ立てられ、今は朝夕の烟りさへ上け兼ぬる始末に、おたかの父某は之を物憂く思ひ、今を去る七年以前即ち明治十九年の春家出せし儘行方知れずなりしと同時に母のおゆら（當年六十四才）も發狂となる等重ね〲の不幸を見るに至れり、然るに爰に憫みても餘りあるはおたかの夫新兵衛は兎角我家の貧困なるを厭ひ、同明治十九年の冬不人情にも狂氣せし發母と妻子を振り捨てゝ北海道へ逃亡せしかば、妻のおたかは有るに有られぬ思ひ如何なれば斯く憂き事の身に集ひ來て力と賴む夫には見離され、生みの父親には生き別れ殘る老母は狂ひ人となり果つるのみかは、四人といふ幼き子供等の行末を女の手一つにて養ひ育つる術さへも途方涙に掻き口說き委るゝ斗り歎きしが、斯くては心弱しと自ら氣を取り直し人は七轉八起とやら、浮き沈みは人間の常、盛なるかと思へば衰へ衰へたるは又榮ふの道理にて、夫れは女ながらも怠らず働きなば縱し家の榮へを見ずとも、一家の活計に躓く事もあるまじと始めて茲に憤起しては丈夫も及ばぬ鐵石心腸來は魚類を少し宛仕入れては之を荷ひ歩きて市中に商ひ、又は時に臨んで菓物類餅菓子類野菜類或ひは小間物類を近在に持ち行きて商ひ、雪の朝〱雨の日も一生懸命商賣に身を任るゝものから、夫新兵衛が逃亡せし日より七年後の今日に至る迄、一家數口饑へ凍へずして經過しつゝあるのみならず、尙おたかは是まで未だ淫がましき所行もなく、又他人の救助も仰がず貞節を守りて逃亡せし父親と夫との一日も早く無事歸町するやうにと、朝夕神佛に祈念し居る由なるが同人の心根思ひやるだにいぢらしく亦た哀れなる物語りにこそ

（巖手公報）

●墺國皇后の精神病　墺國皇后は先年皇太子が非命に薨したるを痛く悲嘆し、爾來快々として年月を消せしが、昨年中より精神病に罹られしを以て侍醫侍臣等は看護に怠りなかりしも、如何にして隙を得たりけん本年二月中旬密に皇居を忍び出で瑞西國に行啓ありしかば、宮中の騷動一方ならず上下官僚は八方へ手分して陛下の往方を搜索せしに、陛下は恙なく瑞西國の或る方に居らるゝ事の判然したるに付、同國皇帝陛下は微行して皇后の在所へ行幸ありて歸國を促されしも、皇后陛下は皇帝へ妾は今より諸國を巡歷せんの志望なれど折々は歸國して亡太子の墓詣でをなすこともあるべしと答へ還啓を拒まれしも、皇帝及び侍臣等が切に其企を諫止し漸く本國の宮殿へ還られしも、其後兎角容體勝れざるよしなるが、最近の病狀は不眠勝ちにして一日平均三時間の就眠なれば、次第に衰弱に陷るより侍醫の勸告により每日三哩は勉めて徒行さるゝことに定め、治療に盡力中なるよしヴイヤナ發の近信に見えたり

（時事）

●篤行の婦人　熊本縣熊本市寺原町大工職大野某の娘、おさり（二十九）は今を距る十二年前即ち明治十五年の三月に、同町の馬場のぶ方へ年六圓の給料にて下女奉公に住込みしが、性來心懸よき者にて十八の娘盛り研かば光らん顏容を粧ひもせず立働き、主人に取つて二なきものと思はれ居たり、主人おのぶは親族よりお條（十七）と云へるを養女に貰ひ、其頃より四百圓を養女の物として其親許に預けしに、お條の實父は快く承知し其後每月利息として二圓づゝ三年が間送り來りしも、別段稼業なき身にて家內三人が僅かの利息に暮せる譯ならず、殊に去十九年頃よりおのぶは僂麻窒斯にて何かと費用多きより、每月三圓を貰ふことゝせり去れど尙不自由勝にて其日を送りしに、おさりは見兼て暇を與れと言出せしをお前に行かれては死するが增しと涙ながらに引留むるにぞ、おさりも去り得ずして給金は物かは賃機を織りて幾分の足にせんと、娘盛りをムザ〱と去年まで十一年の間主人大事と勤め上げたり、然るにおのぶは其頃より重き病の枕に臥したれど、右の如き有樣ゆへ醫藥の手當も十分ならず、殊にお條は十六の小娘にて是といふ役に立たず、薄き蒲團に寒がるおのぶはおさりは每夜添寐して寶子も及ばぬ介抱に、おのぶは手を合せ涙を流して喜ぶのみ容體次第に重り行き、去月十六日遂に空しくなりたりしが、臨終の際親類知己を枕邊に呼寄せ、おさりが今日までの忠實を語り金五十圓に家財道具をお條と折半して讓る旨遺言して死したり去れどおさりは之を取らず跡懇ろに吊ひ居る由、澆季の世此婦人あり大和民族の美風五洲に輝くゆへなるべし、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●婦人流行物　は近頃小紋頗る流行す、地質は相變らず御召縮緬茶鼠色の小縞にして、之れに更紗縮緬の下着を重ねて、二枚袷とすれば先づ美事なり、左れど流行は小紋縮緬の上着に矢張り柿色か淡鼠の小紋縮緬の下着最も流行し、今一段高尚に出れば京御召の小紋織を上着に、古代更紗縮緬の下着を合せて利久鼠色の褄廻しと來たらんには五分も拔目なし、次が稍々手輕の拵にて平御召縮緬の上着に一樂風通織の下着も又可なり、中等品は山糸織にして是れ亦稍々地色の淡き方大流行なり、右の代價は二枚揃ひ十七八圓より二十五圓位なり、最も地質と裏地に由り多少の差あるべしと毎日に見ゆ

●菊地九郎氏の母　菊地夫人名は幾久子、舊津輕藩士奈良莊司の第二女なり、文政二年十二月弘前に生る、資性溫厚篤實志操端嚴方正行爲慈愛公平、父莊司氏は津輕藩の重職たり、當時の執政某と施政の方針に付き意見を異にし、常に正義を執り之と爭ひ遂に獄に降され斬に處し家祿を沒せらる、時に夫人歳十四放浪數年其間母に仕へ弟を育し愁苦を慰し家政を助く辛酸備さに嘗め拮据最も勉む四隣共に稱す、後嫁して菊池新太郎氏の婦となる、不幸にして早く其夫を喪ふ、時に夫人歳三十六三男二女皆幼にして姑氏歳老ひたり、夫人一身を以て之を鞠育し能く武門士道の大躰を得て最も意を男子の教育に留む、毎夜子女を集め赤穗四十七傳實錄を說き、又は論語章句の要點を俗語にて訓へ、三國志大岡政談其他義烈忠孝の談話を以て日課と爲し、織機の前紡車の傍常に書册を備へざるなし又莊司氏の國家に殉し正義に例したる實況を說きて忠義の心を勵まし義烈の氣を養ひ、其間裁縫炊爨の家政を整ふ子女亦其談話を聞くを樂しとせり、其孝道を教ふるや躬を以て自ら之を示し姑氏先づ食せざれば決して兒女に食せしめず、或は菓糖の分與に足らざるある時は之れを老姑に與へて兒女に與へざることあり、一家風を爲し子女常と爲して之を怪まず諸兒年幼にして學に進まざるを以て最も心を薰陶に盡し最も苦慮を極めたり。維新の革命奥羽の亂、長子九郎氏は、山本三郎左衛門石郷岡左治馬本多庸一其他有志士と謀り藩を脫して奥羽の間に奔走し爲す所あらんとするや、夫人に告ぐるに實を以てす、夫人喜びて曰く天下漸く亂れ時事日に迫る、余豫め此事あるを期して準備を爲せり今實に其遲きを怨むのみ、速に行くべしと豫れて準備したる鉢卷及び路金を與へ一首の和歌を添へ其行を送る

ふかくも思へ武士の道
かれてよりいひしことの葉わすれめや

其後二男三男共に松前の役に赴かんとするや、夫人之を送りて曰く予が亡夫に對するの務此に盡きたりと大に喜びて措く能はざると云ふ、明治三年舊藩主士人に田地を分與して移住土着せしむるの諭旨あるや、三子皆家に在らざりしが、夫人深く上旨の在る所を躰し率先決行せんと欲し、獨力諸事を處理し行裝を治め東郡追子野木村に移住せり、又上旨の士人をして自活の土に就かしむるを知り世祿を奉還して自力就產の基礎を立てたり、之亦實に其獨決に出づ當時土着移住の命あるや士人多くは危疑猶豫決する能はざりしに、夫人寡居の身を以て毅然自ら斷じて之を決行せるを以て、世人稱嘆已む能はざりしと云ふ、其追子野本村に在るや子女を集めて學を授け諄々教誨忘らず、村民徳を慕ひ從學するもの最も多し、後ち弘前に移るに及び從て東奥義塾女子部に入るもの亦多し、其徳化の厚き率ね此の如し。夫人は學文に深く詞藻に富む、幼にして文學の要を悟り之を學ばんことを望むも、當時未だ開けず婦女の文學を修むるを必要と爲さず、寧ろ婦人の學問は無用として之れを却け專ら禮節を修め家政を理するを以て足れりと爲せり、故に夫人幼時就學の便を得ず、僅かに文字を記せる廢紙を懷にし厠に行く毎に人目なきの寸暇二三字を暗記し、之を灰に書して字名訓用を其弟に問ひ初めて僅かに假名付の草紙を讀み漸く進みて記錄類に至り遂に經傳史書通せざるなきに至る、其獨學刻苦思ふべし、老後に至り猶讀書を以て樂みとなせり、東奥義塾の女子部を設くるや聘せられて教師となり、專ら女子の教養を掌ること七八年、我地方教育の大に興るや夫人の力、實に居多なりとす、又基督教の德教に必要なるを悟り深く之を信仰し常に聖書を讀むことを好み最も約翰傳を愛讀せり、而して之を以て人を誘導すること亦尠ならず、明治十年の役起れる時既に信者たりしが義烈の心は猶聊かも衰へず、三兒共に戰場に赴かんとするも毫も幾微の顔色に動くなきのみならず、更に深く考ふる處あり傍らより三人の内一人を止めて、第二の機會を待たしめたり、年漸く老ひて子を愛すること愈切なりしと雖も事公けに屬すると云へば未だ嘗て情實を以て肘を引くをなさず却て大に之を奬勵せり。十一年第三兒郡之助氏の米國遊學中に死せし時人皆凶報を夫人に告くるを難んじ、本多庸一齋藤宇一兩氏第一の報知者たりしが相對して其發語の方法に苦みたりしが、夫人却て推察して先づ其凶事に及びたるならんを明言せらるゝに至れり、而して其悲哀元より深厚なりと雖も未だ嘗て怨嗟の痴を語らず信仰を以て能く自ら慰藉せり。又廿一年弘前有志輩風俗の廢頽を憂へ婦人矯風會を興すに當り衆望に推されて之れが會長の任を務む。明治二十三年九郎氏衆議院議員に選擧せらるゝや、夫人家族と共に東京に遷る幾何ならずして不治の症に罹る、其後一旦稍輕快に赴きしが常に長子九郎氏に語りて曰く、予れ不治の症に罹り起たず心既に期する所あり、今逝くも余に於て決して遺憾なし、爾等亦必ず毫も傷悼するなかれ何となれば予は既に天道の在るを知り、自ら足ることを知ればなりと、明治廿六年三月十八日東京本所自邸に於て午後三時溘然永眠に就く時に歳七十五

外　報

○米國なる某機關雜誌に「世界博覽會並に千八百九十三年の死期」と題する一篇の論文あり、其の内には博覽會衛生の狀を述べて人々の死期を早ふする所以を記せり其の言ふ處に依るに恐らく、此の博覽會を見るに堪へざる程なる自躰虛弱の人も此の度は來るべし此れ實に危險なりと云ふべし、只に虛弱なる人のみにあらず强壯なる人と雖も過度の勞働不快樂なる旅店粗食或は流行病等に依りて自躰を害し死期を早ふする事あるべし、故に見物せんと欲する人々は預め左の件々に注意すべしと、第一先づ身躰の健康が博覽會を見るに堪へ得るや否やを定むべし、第二醫師の承諾あるにあらざれば、已が責任を負ふべき人を供なひ行くべからず第三快き健全なる旅店を撰ぶべし、第四過度の勞働を避くべし、第五規則正しく且つ少しづゝ屢々食すべし、食物は勿論新鮮にして健康に益あるものなるべし、第六注意して適宜に飲むべし飲み慣れざる飲料などを服すべからず、此の外猶旅店を早く撰び置くと等に付て注意を與へたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孤兒之友

畜勦子編

●孤兒之友取扱義捐金第八回報告

故小橋勝之助君追弔義捐金

金壹圓也　鳥取縣　米子基督教講義所
金壹圓也　大坂市　高安三郎君
金四拾八錢　京都市　池袋淸風君
金五拾錢　遠江國　芳賀祐之君
小計金貳圓九拾錢

各孤兒院へ寄附金

金二百八拾八圓廿三錢八厘　第七回迄各孤兒院へ寄附
金拾圓也　横濱　某君　孤女學院寄附
金三圓也　東京　星野老母君　同
金三圓也　同　星野せん君　同
金五拾錢　千葉縣　某君　同
金壹圓八十錢　東京明治女學校愛の睦　同
全貳圓五十錢　山口縣　富海松兵衞君　同
金壹圓也　東京　瀧田君　同
金五十錢　同　同孝君　同
金三拾錢　同　無名君　孤兒の友準備金の內へ
合計金三百拾三圓七拾三錢八厘

故小橋勝之助君追弔義捐金募集

信仰に倚り、献身の生涯を送りたる人として、吾等は深く、故小橋勝之助君を追崇す。若し、身外に持てる者悉皆を喜捨し、只管ら神の國と其義とを求め　一襲の衣、一品の食も、悉な與へらるゝ者をもて支持せし人、何處にありやと云はゞ、吾等は君を推す。若し周密着實なる經倫を畫するに一々祈禱を以てし、日々夜々の事業一些も信仰の結果ならざるなき禱りの人、何處にありやと云はゞ、吾等は亦君を推す。吾等は深く君を知り、亦君を敬重したり。一朝君忽然として逝きぬ。其至誠長久に盡きず、志を繼ぎて博愛社の事業を成すもの、其人ありと信ずと雖ども、君が長眠は、該社に於ける非常の損失たるとを知る也。吾等は、君を推重し、亦君が遺業の彌よ發達せんとを希圖し、君を失ひたる博愛社の損失を幾分にても補足せんとを望みて、玆に君を追弔するが爲めの義捐金募集の事を發起す。世上同志の友ありて、吾等が微衷を贊同し、此回幾干の義捐を寄するものあらば、幸ひなり。

義捐金は女學雜誌社內孤兒之友にて取集め、博愛社小橋氏遺族に送輸すべし。

明治二十六年四月

植村正久　湯谷磋一郎
巖本善治　藤井米八郎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（七十三）權中納言匡房

高砂の尾上の櫻
咲にけり
外山の霞たゝすも
あらなん

（七十四）源俊頼朝臣

あすも來ん野路の玉川
萩こえて
色なる波に
月宿りけり

（七十五）藤原基俊

契りおきしさせもか露を
命にて
あはれことしの
秋もいぬめり

（七十六）法性寺入道前關白大政大臣

和田の原こき出て見れは
久かたの
雲井にまかふ
沖つしら濱

（七十七）崇徳院

もみち葉の散ゆく方を
尋ぬれは
秋もあらしの
聲のみそする

（七十八）源兼昌

淡路嶋かよふ千鳥の
なく聲に
いくよ寐さめぬ
須磨の關守

（七十九）左京太夫顯輔

秋風にたなひく雲の
たえまより
もれ出る月の
蔭のさやけさ

（八十）待賢門院堀川

常磐なる松もや春を
しりぬらん
はつねを祝ふ人に
ひかれて

（八十一）後徳大寺左大臣

ほとゝきす鳴つるかたを
なかむれは
只有明の月そ
殘れる

（八十二）道因法師

かものゐる入江の蘆は
霜かれて
おのれのみこそ
青羽なりけれ

（八十三）皇太后宮太夫俊成

世の中よ道こそなけれ
思ひいる
山の奥にも
鹿そなくなる

（八十四）藤原清輔朝臣

なからへは又此頃や
忍はれん
うしと見し世そ
今は戀しき

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

（八十五）● 俊惠法師

なかめやる心のはてそなかりける
明石の沖にすめる月かけ

（八十六）● 西行法師

心なき身にもあはれは知られけり
鴫たつ澤の秋の夕暮

（八十七）寂蓮法師

村雨の露もまたひぬ槇の葉に
きり立のほる秋の夕暮

（八十八）● 皇嘉門院別當

山川におろす筏のうきなから
すきゆくものは吾身なりけり

（八十九）● 式子内親王

かへり來ぬ昔を今と思ひ寐の
夢の枕に匂ふ橘

（九十）● 殷富門院大輔

春風の氷吹とくたえまより
みたれてなひく青柳の糸

（九十一）後京極攝政大政大臣

きり〳〵すなくや霜夜のさむしろに
ころもかたしき獨かも寐ん

（九十二）● 二條院讚岐

散かゝるもみちの色は深けれと
わたれは濁る谷川の水

（九十三）鎌倉右大臣

世の中は道にもかもな渚こく
あまの小舟の綱手かなしも

（九十四）參議雅經

三吉野の山の秋風さよふけて
ふる里さむく衣うつえ

（九十五）前大僧正慈圓

おふけなく浮世の民におほふかな
我たつ杣にすみ染の袖

（九十六）入道前大政大臣

花さそふ嵐の庭の雪ならて
ふりゆくものは我身なりけり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（九十七）●權中納言定家

駒とめて袖打はらふ
かけもなし
佐野のわたりの
雪の夕暮

（九十八）從三位家隆

風そよく奈良の小川の
夕暮は
みそきそ夏の
しるしなりける

（九十九）後鳥羽院

人もをし人も恨めし
あちきなく
世を思ふゆへに
物おもふ身は

（百）順德院

百敷やふるき軒端の
しのふにも
なを餘りある
昔なりけり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

成島鎌吉
籾山釣 合著

有益鳥類圖譜

製本既成
大判洋裝美本
定價金壹圓七拾五錢
郵便税金拾錢

本書は農業上有益の鳥類にして狩獵規則第二十四條(禁止鳥)第二十五條(保護鳥)に掲載せる左の**鳥類**を實物に就て描寫し之に極彩色を加へ精密の解說を附し**飯島理學博士**の校閲を經たるものにして該規則執行官、狩獵家、農業家は勿論教育及圖畫の參考として亦缺くへからさる最良書なり

一鶴各種　一燕各種　一雲雀　一鸐雉　一鷭　一鳩
一鶺鴒　一四十雀　一日雀　一鶉　一鵠　一鵙
一五十雀　一葦雀　一鷦鷯　一鴻雁　一鵯　一橿鳥
一杜鵑　一啄木鳥　一鶲　一鳧各種　一鶇　一秧鷄
一椋鳥　一田鷚　一雉　一鷸各種　一鷺各種

發兌元　東京市日本橋區呉服町三十二番地　牧畜雜誌社
大賣捌　同　日本橋區萱屋町六番地　東陽堂
同　神田區通新石町三番地　東陽堂支店

賣捌所　東京日本橋區通三丁目　丸善商社書店
同京橋區南傳馬町二丁目　有隣堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之に版にして、世の同志に示すこととす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

發行　東京下六番町六番地　明治女學校
發賣　同　女學雜誌社

林學士星野愼之輔君著

昆蟲 植物 金石 採集法

正價金八錢
郵稅金貳錢

昆蟲界
昆蟲分類
昆蟲變態
採集地
採集注意
採集器
貯蟲法
刺針法
昆蟲運搬法
幼虫類飼育法

植物界
葉とは何
花とは何
枝とは何
植物南
採集すべき部分
採集氣節
採集器具
乾腊法
標本製造

金石界
金石分類名稱
金石の現出
識別鑑定法
岩石の現出
土性の現出
土性分類名稱
土性分析法
採集器具
採集法方

麗かなる新緑の野外に杖を曳きし時、諸子は可憐なる峽蝶を見ていかに感ぜしか、涼しき樹陰の溪流に沿ひ遠足せし時、諸兄は美麗なる昆蟲を觀て何かに感ぜしか。之を採りて直に納め、坐右に博物館を開きて友を延き、一は天の美を樂み、一は研究の好材料とせんとするならん、之を以て散策一層の樂み深し、多愛なる諸友よ予が採集を講ずるは、蓋し割愛耳云々之れ著者の言なり

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

福音新報

毎金曜日發行

四月十四日發行第百九號目次

福音新報 釋迦の誕生日につきて **教の栞** 基督教の宇宙論 **教報** 靜岡普教會の分裂○名古屋、尾州永泉教會、伊勢津、神戸、阿波德嶋、高知縣長岡各地方通信○監督南界以松山地方都會○宇都宮通信○栃木縣下基督教會統計○仙台通信組合教會總會○軍人基督教徒親睦會○本鄉會堂演說會○在京鹿兒嶋縣信徒親睦會○銀坐美以教會青年會演說○東京第一中會○同第二中會○後樂園に於ける組合派の懇親會○明治學院英語俱樂部等 **日曜日の午後** の夕光 **團欒** 家庭消息其一(湖處子)○惠の露(賤の女)○祈禱の奇驗 **外事** 理想の教會○昨年の米國出版統計○青年の新事業

定價一部二錢五厘○十三部(三ヶ月分)三十一錢五厘○廿六部(半ヶ年分)六十錢○五十二部(一ヶ年分)一圓十四錢○府外は一部に付郵稅五厘を要す

發行所 麴町區三番町三十五番地 **福音新報社**

日本評論

毎月第二土曜發行

四月八日發行第五十號目次

日本評論 今日の宗教論及び德育論(植村正久)○直假辨(三宅雄二郎)○幽明の隔絶何かあらん **雜錄** 綽號の流行(天籟道人)○胡蝶の詩歌につきて(戸川殘花)○讀書偶感——愛、懷疑と人情○ものゝあはれは之よりぞ知る、美人の一顧壯士を激勵す、戀愛の神聖を瀆す何等の無情漢ぞ(雲井春香) **批評** 井上哲二郎氏と高橋五郎氏、犧牲、三籟

定價一冊六錢○六冊三十三錢○十二冊六十四錢○府外は一冊に付郵稅五厘を要す

發行所 麴町區三番町三十五番町 **日本評論社**

電話九六九號 內外 **國醫學士出張**

診察 午前八時至十一時 **日曜休**

赤坂區氷川町 **赤坂病院**

東京經濟雜誌

第六百七拾壹號目錄
四月二十二日發兌

◎朝鮮京城ノ不穩並ニ防穀事件◎朝鮮貿易ヲ日本人ノ手ニ占ムルノ政策如何◎私設鐵道ノ計畫盛ナリ◎居留地制度ト內地雜居◎近世財政事情

論説

○複硬貨制要論○東印度邊海ニ向ヒシ和寇

寄書

○鼎軒先醒ニ呈スルノ書○取引所ノ修正ヲ望ム

雜報

法典調査會總裁及ヒ主査委員ノ任命○地方官會議○福島縣知事ト同縣會トノ爭議ニ關スル法制局ノ裁定○八重山艦朝鮮ニ赴ク○東學黨ノ壯士日本公使館ニ迫ル○米國政府布哇國ノ保護ヲ解ク○在米日本勞働者ノ被害○生絲盛況ノ原因及ヒ將來ノ見込○群書類從ノ豫約者非常ニ多シ○駿豆紀行續○廿六年三月中外國貿易ノ景況○大坂商船會社二月中營業概況

銀行及商業之景況

兌換銀行券發行高、同流通高正貨準備ノ景況、外國銀行ノ景況、東京手形交換所手形交換高、東京金融ノ景況、東京公債及株券ノ商況、東京株式取引所二月中ノ商況、東京限月米及正米ノ商況、東京諸商品ノ商況

定價壹冊金七錢(市外郵税五厘)

發兌所 東京々橋區彌左衛町七番地 經濟雜誌社

史海

第廿二卷目次

◉似せ系圖……………………久米邦武

支那の聖人悉く夷狄となり日本の名族大概馬骨となる然りと雖も考證正確、筆端焰あり、誰れか能く之に抗するものぞ

◉李青蓮……………………鷲峯生

世人單に李白の詩を稱す鷲峯氏は其人を知り其詩を愛すと謂ふべし

◉フライヘル、フオム、セタイン……………………東嶺野史

普國の偉人スタイン傳此篇に至りて終れり其功業亦此篇述ふる所を以て最大となす

◉新井白石……………………足立栗園

白石は偉人なり、然れども其人を識るもの果して幾人かある此篇眼力極めて高し

◉考證にはコロボックル論の顛末及ひ日、韓、滿洲、土爾基、南洋諸島マレイ半島等の言語對照あり、

○批評欄內は少々靜穩の模樣なり

(定價)一冊金九錢。十冊前金金七十五錢。市外は一冊に付郵税二錢增◉每月一回發兌

發行所 東京京橋區彌左衛門町 經濟雜誌社

大取次所 東京。東京堂、巖々堂、東海堂●大坂、岡島新聞舖●京都。便利堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石重譯

希臘孝子 腓立比物語

兼て豫告せし腓立比が孝子物語出版せり今其大意を擧れば

定價金卅五錢
郵税金六錢

今を距ること六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて、十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛に感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け、又船長の助言により腓立比基督信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督教徒なること露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を省みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドゥイン族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も、亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り。バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助を得て遂に兩親を奴隷苦役の中なり十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

右は譯者か三年の辛苦を經てものせし、悲むべく喜ぶべく驚くべく憎むべく、境遇の變化、涙なくして讀をへられず。譯者或人に與ふるの書は「實に小弟初めより此種の文學にならはず殆んど產の劬勞をいたし、或は車上に巢林の戲曲を繙きて、兩眼のいたくかすむをも顧みず、枕邊に曲亭の集を備へ指頭の寒に感覺なきに至り云々。請ふ一本を購ひ歟さるを知れ。

發行所 東京下六番町 女學雜誌社
賣捌所 同出雲町 警醒社書店

農科大學出身星野愼之助君編

應用植物編 (附)詩經植物類考

正價金四拾錢
郵税六錢
二百三十頁
クロース製本
四月十四日出版

右は君が大學々窗にありし時自から便に供せんとて編み置かれしもの、此頃某校教授上の必要より印刷せられんとするを乞ふて出版せり、之を一見するに便利なる有用植物索引書とも言ふべく、明亮なる有用植物の戸籍とも言ふべく、簡明なる植物分類撿定書とも言ふべく、殊に凶年に食し得べきもの、藥用のもの、有毒のもの、牧草用のもの、纖維用のもの、其他種々の用に供すべきものを一々明かにして其性質形狀などを揭げ、澱粉纖維タンニン等の製法を示す、而して索引表ありて容易に之を探ぬるを得るなど親切至れり、其分類撿定表、各科植物特徴表、材木有害灌木利用表の如き、最も便を盡す。就中詩經植物類を務めて翻譯し支那の歌草詩花を明かにせし如きは文學の範圍に關する所少しとせず。要するに植物學を學ばざる者も又農家にも一本を備へて便利言ふべからざるものなり。

發行所 東京麹町區下六番町六番地 女學雜誌社
發賣所 日本橋區通三丁目十四番地 丸善商社書店
賣捌所 ◉瑞穗屋◉警醒社◉東京堂◉中西屋◉有隣堂◉小林

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文學界

第四號要目

四月廿九日發行

明智光季　　殘花
人世の風流を懷ふ　　枇杷坊
對花小錄　　脱蟬
對茶寂話　　暗光盧主
花幻　　棲月
暮れ行く春の姿を惜む　　禿木
筆のすさび、聞けること　　花圃
彙報
涙六茶屋○新刊書籍○書籍紹介
英詩評釋
グレー氏春の歌　　鬱孤洞主
附錄
兼好法師家集
阿佛乳母の文

定價表

	東京市內	地方郵稅共
一冊	六錢	八錢
六冊	卅三錢	四拾五錢
十二冊	六拾錢	八拾四錢

發行所　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
大販賣　東京堂◉武藏屋◉東海堂◉便利堂

本校試驗結了に付、高等科、普通科、共に入學を許す、至急に申込を乞
但し規則書御入用の御方は、郵劵二錢封送あれ
東京麹町區下六番町六番地　明治女學校

雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割増の事
雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃をも濟にて御送付相成度候

女學雜誌代價

六冊	前金三十五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同　七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同　一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵稅	金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

明治廿六年四月廿六日內務省認可
明治廿六年四月廿八日印刷
明治廿六年四月廿九日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京府南豐嶋郡千駄ヶ谷村元原宿村百五十九番地　堀口庄三
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍工塲（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY